

蔵持古屋敷遺跡

高祖遺跡群 II

平成4年度前原市公共施設建設に伴う埋蔵文化財調査報告書

前原市文化財調査報告書

第 46 集

1993

前原市教育委員会

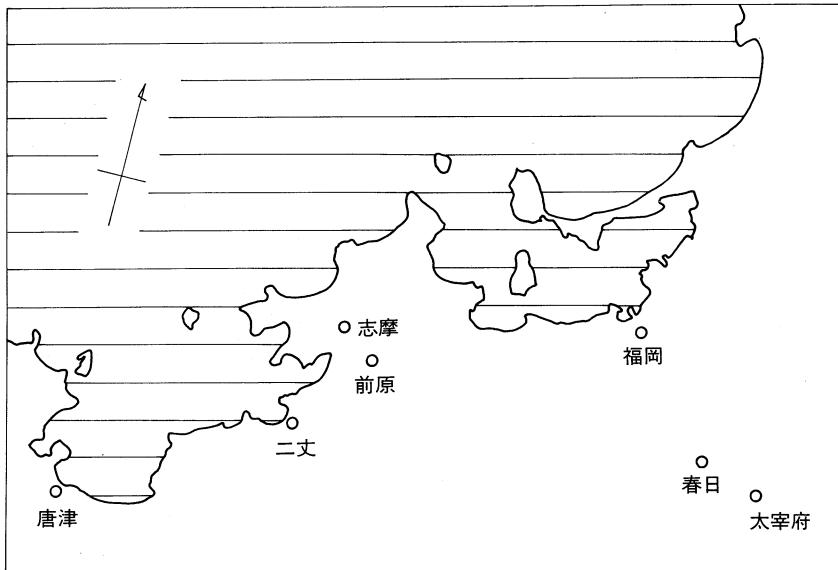
蔵持古屋敷遺跡

高祖遺跡群 II

平成4年度前原市公共施設建設に伴う埋蔵文化財調査報告書

前原市文化財調査報告書

第 46 集



1993

前原市教育委員会

序

前原町は、昭和30年までに前原、波多江、加布里、長糸、雷山、怡土の6町村が順次合併して現在の行政区域となりました。

当時は人口3万2千人ほどの閑かな田園都市でありましたが、隣接する福岡市が九州の政治・経済の中核都市として急速に発展をとげるとともに、そのベッドタウンとして人口増加を続けました。平成2年にはついに5万人の大台を越え、これを契機として町の内外から市制移行への気運が高まり、ついに平成4年10月1日をもって前原市として新たなスタートをきることとなりました。

町では従来から町内の様々な施設の新設・改善を順次行なってまいりましたが、市制移行後もその充実にむけてさらなる努力が求められており、今後、引き続き多くの公共施設の建設が予定されています。

本年度は、怡土小学校大食堂と雷山公民館舎の2施設の新・改築されることとなりましたが、工事に先立つ事前調査の結果、いずれも地下に埋蔵文化財が眠っていることが確認されたため、発掘調査を実施しました。調査によって多くの貴重な成果をあげることができましたが、現状のままで保存することが困難であったため、止むを得ず記録に留めて後世に伝えてゆくことになり、本書の刊行へといたった次第です。

最後に、本書が広く文化財の保護および学術研究位置資料として活用いただければ幸いに存じます。

平成5年3月31日

前原市教育委員会
教育長 樗木昭生

例 言

1. 本書は平成4年度前原市公共施設建設事業に先駆けて前原市教育委員会が行なった埋蔵文化財発掘調査の報告である。
2. 発掘調査は市単独事業として前原市教育委員会が平成4年度に実施した。
3. 本書に使用した遺構実測図は、蔵持古屋敷遺跡については瓜生秀文、林 覚が実測したものを野田純子が製図した。また出土資料の実測・製図は、瓜生、野田、川上辰子、高橋久枝、末松伸子、山口敏子、島影やよいが分担して行なった。高祖金口遺跡については角浩行、岡田りつ子、柏田睦子、和多治子が実測し、榑崎尚子、中原晴香が製図した。
4. 掲載した写真のうち気球による現場空中写真は（有）空中写真企画の撮影機材使用による。
5. 本書の執筆分担は以下に示すとおりである。

I、II-1	—————	瓜生
II-2	—————	角
付載	—————	岡部
6. 本書の編集は瓜生が行った。

本文目次

	頁
I. はじめに	1
1. 調査にいたる経過	1
2. 調査の組織	1
II. 調査の記録	3
1. 蔵持古屋敷遺跡の調査	3
(1) 位置と環境	3
(2) 平成4年度の調査成果	6
A. 弥生～古墳時代の遺構・遺物	6
B. 歴史時代の遺構・遺物	14
(3) まとめ	24
2. 高祖金口遺跡(2次)の調査	26
(1) 位置と環境	26
(2) 平成4年度の調査成果	26
(3) まとめ	29
付載 蔵持古屋敷遺跡出土資料補遺	31

図版目次

図版1、蔵持古屋敷遺跡調査地点全景(西部)
図版2、蔵持古屋敷遺跡調査地点全景(東部)
図版3、a. 1号住居(上から)
b. 1号住居(南から)
図版4、a. 2号住居(上から)
b. 2号住居(南西から)
図版5、a. 3号住居(南西から)
b. 土壙(南西から)
図版6、a. 土器溜り(北から)
b. 土器溜り(近景)

- 図版7、 a. 1号掘立柱建物（東から）
b. 1号溝（北から）
- 図版8、 a. 1号溝土層
b. 1・2号溝間の土層
- 図版9、 a. 1・2号間の土層（近景）
b. 2号溝（上から）
- 図版10、 a. 2号溝角部（西から）
b. 2号溝角部（南から）
- 図版11、 a. 2号溝（東から）
b. 2号溝土層
- 図版12、 a. 2号溝土層
b. 3号溝土層
- 図版13、 a. 土壇出土土器
b. 2号住居出土土器
c. 土器溜り出土土器
- 図版14、 a. 1号溝4層出土土器
b. 1号溝攪乱層出土土器
- 図版15、 a. 2号溝1層出土土器
b. 2号溝2層出土土器
c. 2号溝3層出土土器
- 図版16、 a. 3号溝出土遺物
b. 4号溝出土土器
c. 柱穴出土土器
d. 表土採集土器
- 図版17、 a. 遺跡遠景（南から）
b. 遺構検出状況（南から）

挿 図 目 次

	頁
第1図、蔵持古屋敷・高祖金口遺跡の位置 (1/75,000)	
第2図、蔵持古屋敷遺跡の位置と周辺の地形 (1/5,000)	4
第3図、蔵持古屋敷遺跡遺構配置図 (1/150)	5
第4図、弥生～古墳時代の遺構配置図 (1/250)	6
第5図、1号住居出土土器実測図 (1/3)	7
第6図、2号住居実測図 (1/60)	8
第7図、2号住居出土土器実測図 (1/3)	9
第8図、土壙実測図 (1/60)	10
第9図、土壙出土土器実測図 (1/3)	11
第10図、土器溜り出土土器実測図 (1/4)	12
第11図、土器溜り出土土器実測図 (1/4)	13
第12図、掘立柱建物実測図 (1/60)	14
第13図、溝遺構配置図 (1/250)	15
第14図、1号溝土層図 (1/20)	16
第15図、1・2号溝間の土層図 (1/30)	16
第16図、1号溝4層出土土器実測図 (1/3)	16
第17図、1号溝攪乱層出土土器実測図 (1/3)	17
第18図、2号溝土層図 (1/20)	18
第19図、2号溝1層出土土器実測図 (1/3)	19
第20図、2号溝1層出土土器実測図 (1/3)	20
第21図、2号溝2層出土土器実測図 (1/3)	21
第22図、2号溝3層出土土器実測図 (1/3)	22
第23図、3号溝土層図 (1/20)	23
第24図、竣工した大食堂 (平成5年3月)	26
第25図、遺跡周辺の地形 (1/5,000)	27
第26図、調査区全体図 (1/150)	28
第27図、南壁土層断面実測図 (1/80)	29
第28図、伊都歴史資料館保管資料実測図① (1/3)	31
第29図、伊都歴史資料館保管資料実測図② (1/4)	32

I. はじめに

1. 調査にいたる経過

雷山公民館は老朽化に伴い当教育委員会において平成4年度事業として、その改築が計画された。この計画では用地拡張の上、新しく公民館を改築するようになっていたため、事業の担当課である社会教育課から埋蔵文化財発掘の通知が平成3年7月に文化課に提出された。これを受けた文化課は試掘調査を実施し遺構を確認したため、再度発掘調査についての協議を行なった。計画では平成4年7月からの工事着工が予定されていたため直ちに発掘調査を開始した。発掘調査は平成4年4月23日より開始し、同年6月27日に終了した。

怡土小学校も給食室の老朽化と新方式の学校給食導入のため、当教育委員会において平成4年度事業として給食室建て替え並びに大食堂新築が計画された。同小学校では以前に校舎増築に伴い埋蔵文化財の発掘調査が実施されていた。このことより文化課では事業の担当課である学校教育課と協議を行い埋蔵文化財発掘の通知提出を要望した。平成4年5月、提出を受けた文化課は試掘調査を実施し遺構を確認したため、再度発掘調査についての協議を行なった。計画では7月からの工事着工が予定されていたため直ちに発掘調査を開始した。発掘調査は5月25日より開始し7月4日に終了した。

2. 調査の組織

本調査における組織の構成は以下のとおりである。

調査主体

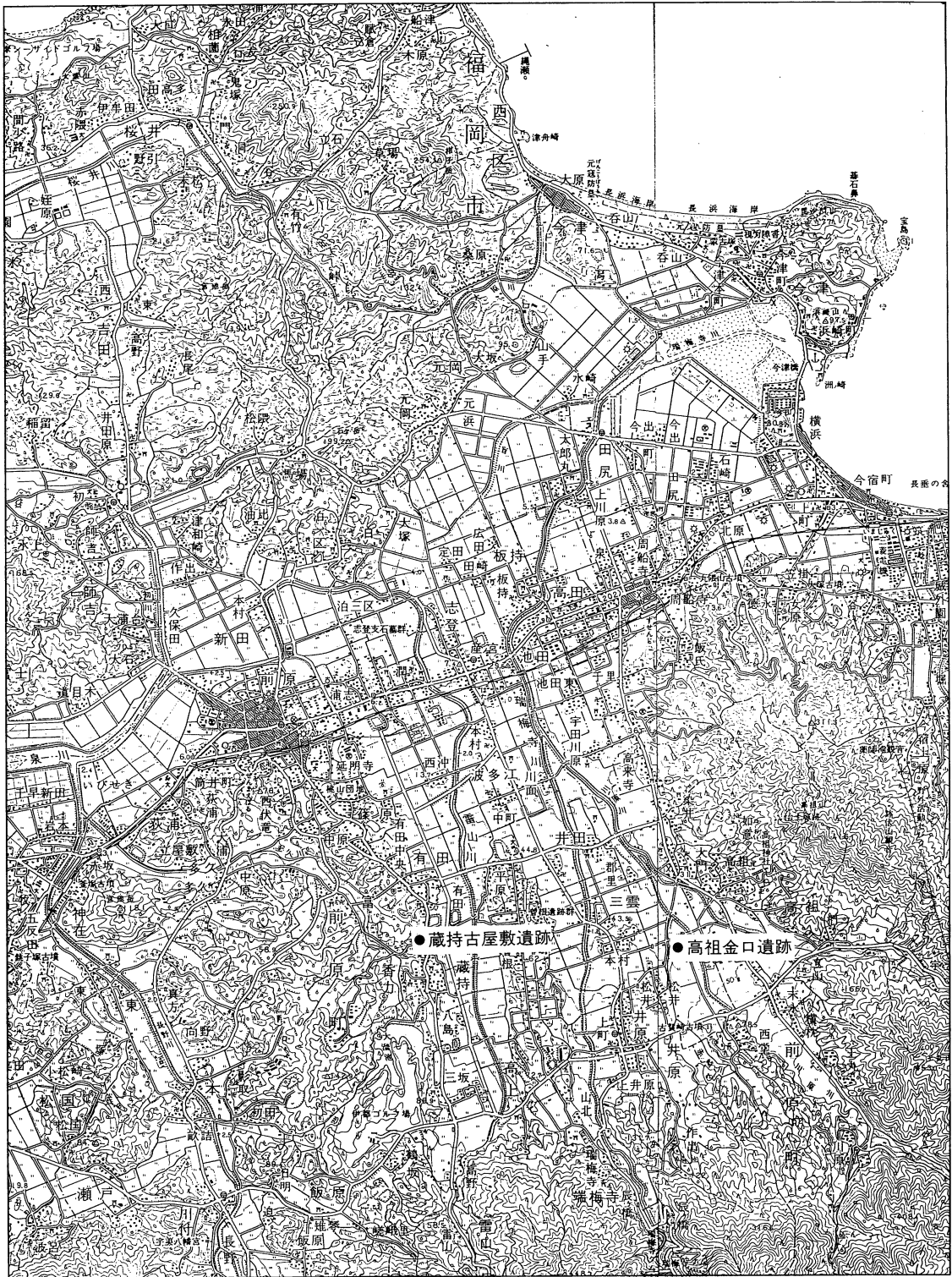
前原市教育委員会

総括	教育長	樗木昭生
	教育部長	菊竹利嗣（平成4年4月～11月文化課長兼務）
	文化課長	清水義弘（平成4年12月から）
	文化財係長	川村 博
庶務	文化振興係長	吉村耕治
発掘調査	文化財係主事	林 覚（雷山公民館担当）
	同	瓜生秀文（同上）
	同	角 浩行（怡土小学校担当）
発掘作業	米山八重子 柏田睦子 山崎千代子 牧井定代 藤森峯子 和多治子	

岡田りつ子 藤木綾子 中村照子 原野スミ 中峰幸枝 高橋マツ子
三島美也子 平山富士子 島崎弘子 青木輝代 藤森啓子 横山豊子
本田タツ子 菊池ナオ子 小金丸利枝 徳永美根子 山崎チヨ子
山崎シナノ 柳原きみ子 久間美佐子

整理作業 山口敏子 川上辰子 高橋久枝 末松伸子 島影やよい 豊柁美智子
柴田由美子 榎崎尚子 末益真奈美 中原晴香

なお、平成4年10月1日をもって前原町が市制移行したのにもない、当教育委員会もその
名称を前原市教育委員会へと改めたことを付記しておく。



第1図 蔵持古屋敷・高祖金口遺跡の位置 (1/75,000)

II. 調査の記録

1. 蔵持古屋敷遺跡の調査

(1) 位置と環境

蔵持古屋敷遺跡は東に雷山川、西に長野川が流れる丘陵上に位置する。当遺跡の北約500mには熊野神社があり、その本殿裏の丘陵最高所に有田1号墳が所在する。この有田1号墳が所在する丘陵の北には上罫子遺跡^{注②}があり、弥生時代後期と古墳時代後期の集落の分布がみとめられる。

東に目を向けると怡土平野が広がる。この怡土平野には、奈良から平安時代にかけて条里制が施行されたと考えられている。当遺跡周辺は大野郷に比定され、付近の小字名に「夏目」とあるのは長治2年の史料にある「菜束」の遺称とする説もある。

南に目を向けると道を隔てた10m先には雷山小学校遺跡がある。この雷山小学校遺跡からも時期は不明であるものの、溝等が検出されている。さらに奥づまった南には雷山がそびえたつ。その雷山の中腹、標高400~480mを測る2つの尾根に挟まれた緩やかな勾配の沢筋に雷山神籠石が所在する。この雷山を含み西日本には13の神籠石式山城の分布が確認されている。今日まで一部発掘調査が行なわれ、その結果7世紀代に築城されたと考えられているがいまだ不明な点が多い。なお、築城年代に関して『日本書紀』敏達12年条における百濟から召喚された日羅の「毎於要害之所、堅築壘塞矣」という奏言に注目して敏達12年(538年)を上限とする説がある。また、『日本書紀』斉明紀4年の末尾是歳の条における「以兵士甲卒陣西北畔。繕修城柵断塞山川」という記述から「以兵士甲卒陣西北畔」の部分^{注⑤}を斉明天皇の西征、「繕修柵断塞山川」の部分^{注⑥}を神籠石式山城築城と解釈し、斉明4年(658年)を神籠石式山城の築城年代とする説もある。

参考文献

注①、岡部裕俊編『井原遺跡群』(前原町文化財調査報告書第35集・1991年)

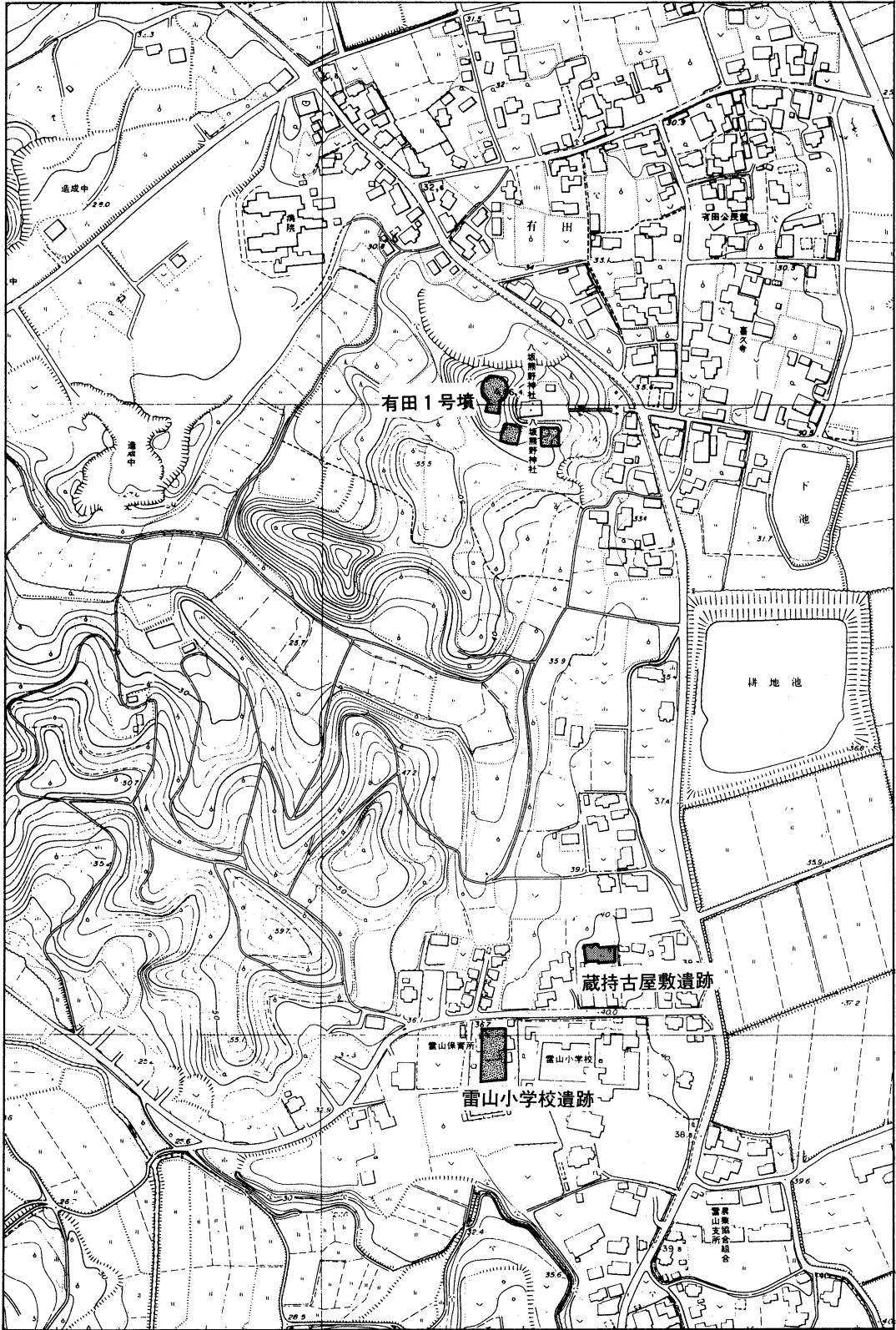
注②、川村 博編『上罫子遺跡群』(前原町文化財調査報告書第3集・1980年)

注③、日野尚志「筑前国怡土・志麻郡における古代の歴史地理学的研究」(『佐賀大学教育学部論文集』第20集・1972年)

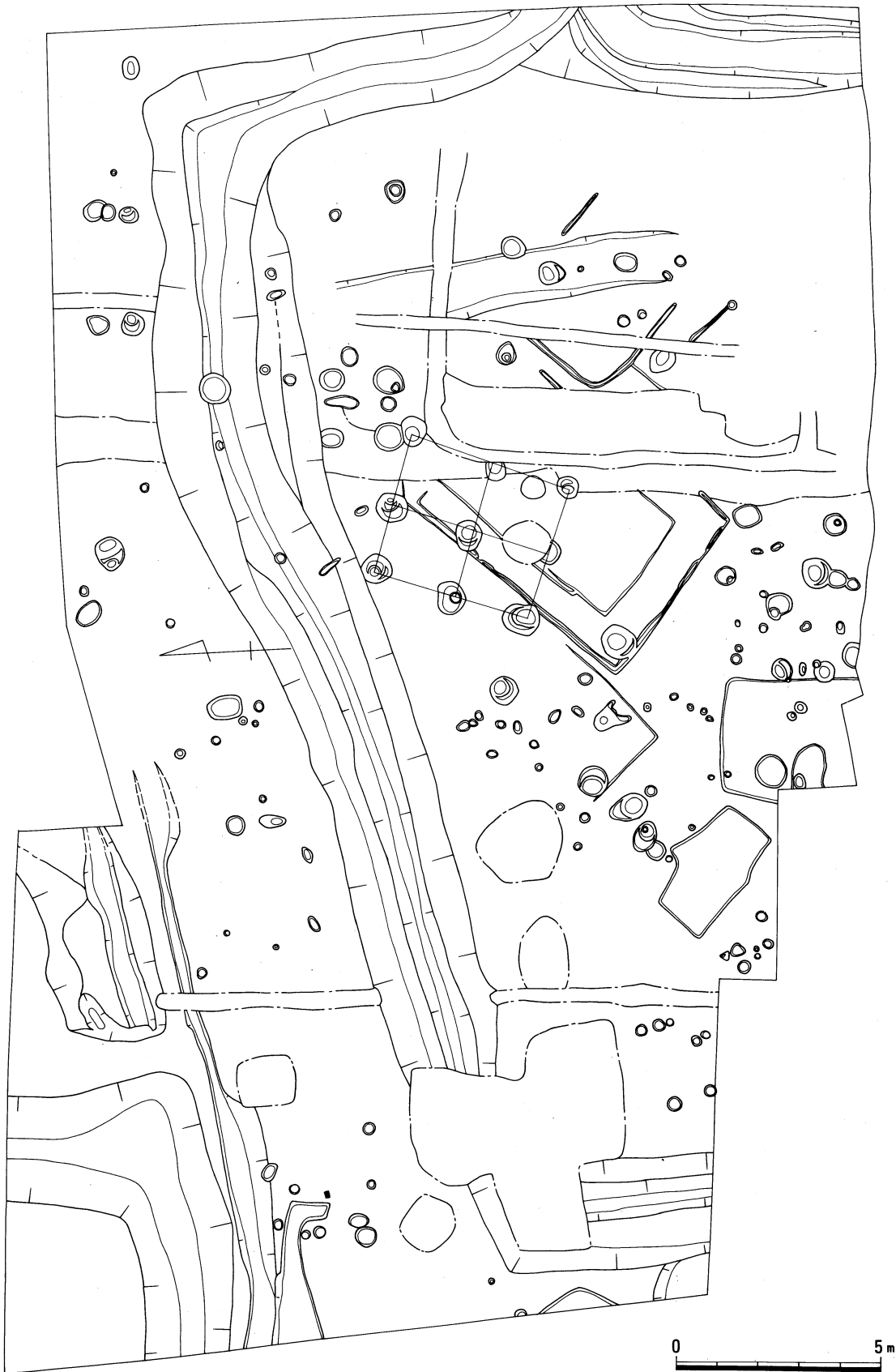
注④、「府老藤原延末田地賣券」(『平安遺文』古文書編第4巻・1501頁収録)

注⑤、原田大六「神籠石の諸問題」(『考古学研究』第6巻第3号・1959年)

注⑥、渡辺正氣「神籠石の築造年代」(『考古学叢考』中巻・斎藤忠先生頌寿記念論文集刊行会編・吉川弘文館・1988年)



第2図 蔵持古屋敷遺跡の位置と周辺の地形 (1/5,000)



第3図 蔵持古屋敷遺跡遺構配置図(1/150)

(2) 平成4年度の調査成果

A. 弥生～古墳時代の遺構・遺物

竪穴住居跡

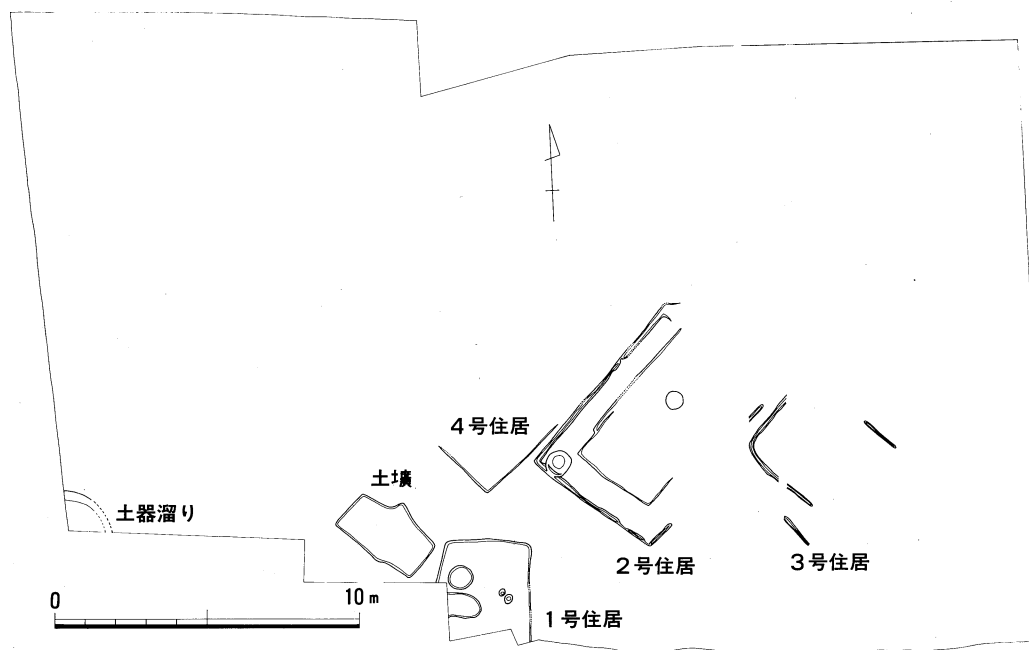
調査区内で検出した竪穴住居跡は計4棟である。いずれも平面が方形もしくは長方形プランを呈している。削平が著しいため遺構残存状況はあまり良くない。なお、1号住居跡の北西にも住居跡の床面と想定し得る長方形の遺構が1つあるがここでは土壌としておく。

1号住居（図版3）

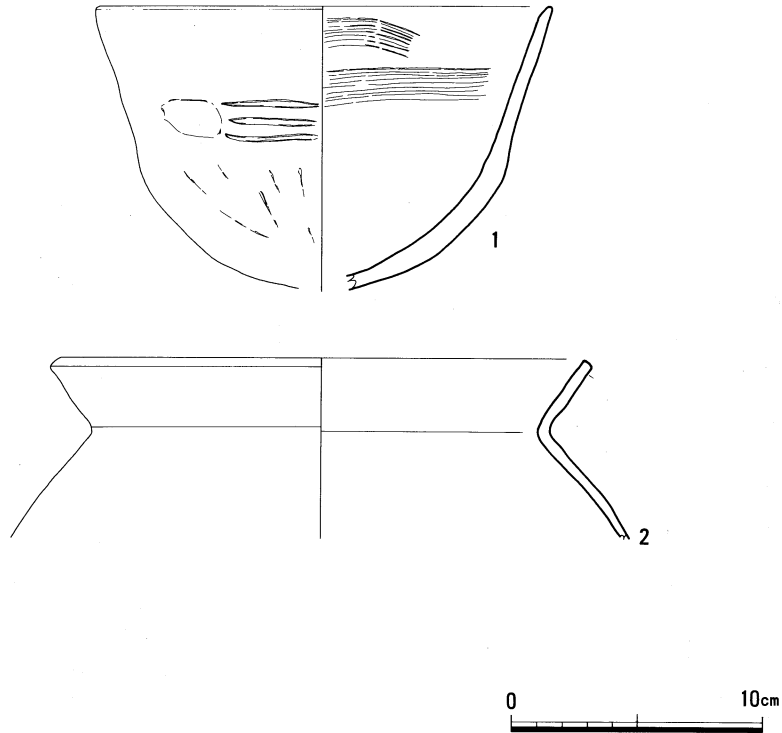
調査区の最南部に位置し、不正長方形の平面プランをなす住居跡である。主軸長は不明であるが、幅3mを測り主軸方向をほぼN-Sに置く。床面東部に2つの柱穴跡、西に1つの柱穴跡があり、その柱穴間は約2mである。かまど、炉址等は確認できなかったが、床面北端部に直径30cmの楕円形を呈す炭化物の堆積部分が見られる。埋土及び床面から土師器が出土した。

出土土器（第5図）

1, 2は床面から出土したものである。1は椀で復元口径17.8cm、器高11.4cmを測る。口縁部は外反している。外面はへら削りの後、体部中央にタタキが施されている。内部はへら削りの後、口縁部にハケ目調整が見られる。2は、口径20.8cmの甕である。口縁部と体部の1部の



第4図 弥生～古墳時代の遺構配置図 (1/250)



第5図 1号住居出土土器実測図 (1/3)

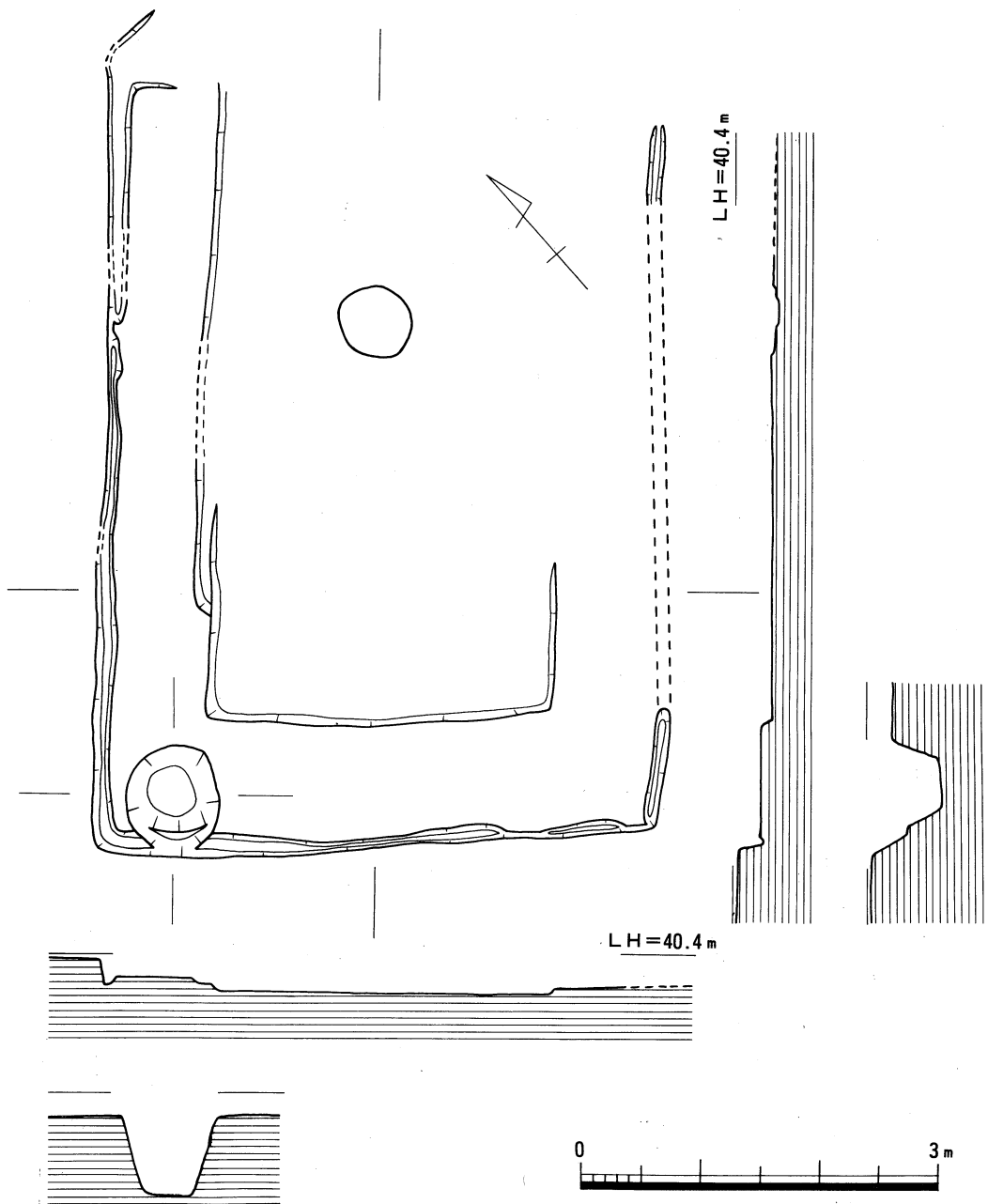
み残存していた。外面の調整等は観察できなかった。内面は不定方向のケズリ、口縁部はヨコナデ調整がみられる。

2号住居 (第6図 図版4)

1号住居跡の北東約2.5mに位置し、長方形の平面プランをなす住居跡である。主軸長は不明であるが、幅4.7mを測り、主軸方向をN-50°-Eに置く。検出した住居跡のなかで最も遺存状態の良い遺構で、ベッド状遺構が確認できる。遺構の隅に貯蔵穴と想定し得る部分があり床面の中央部には直径60cmの円形を呈す炭化物の堆積する部分がみられる。埋土及び床面から土師器が出土した。

出土土器 (第7図 図版13)

1は高杯の脚柱部、2、3は鉢、4は甕である。1は杯部、脚裾部を欠損し、外面はへら削りの後ナデ、内部はへら削りの調整である。2は復元口径16.6cmで、口縁部はヨコナデ調整である。3は復元口径20.6cmで、口縁部はヨコナデ調整である。4は体部下半を欠損する。復元口径18.4cmを測り、外面はヨコナデ調整であり、体部上部に沈線がみられる。内面は体部に不定



第6图 2号住居实测图 (1/60)

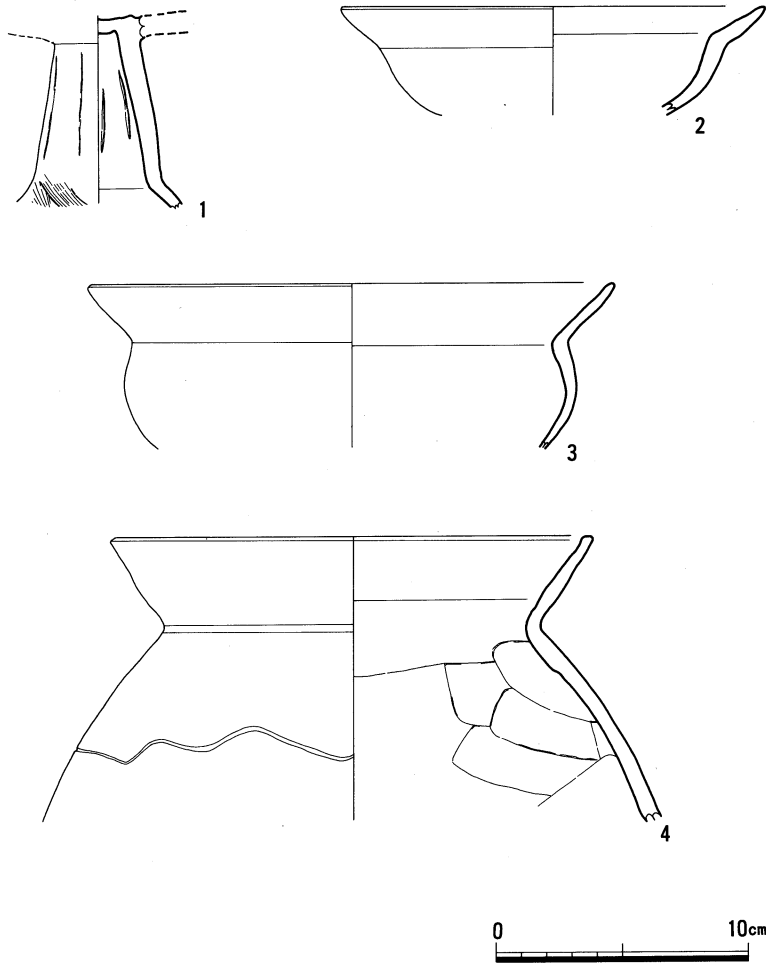
方向のケズリ、口縁部はヨコナデ調整となっている。

3号住居（図版5）

2号住居跡の東約1mに位置し、不正長方形の平面プランをなす住居跡である。削平を著しく受け、床面及びベッド状遺構の1部を残すのみである。埋土及び床面から土師器片が出土したが、細片ばかりで図示し得なかった。

4号住居

1号住居跡の北約1.5mに位置し、長方形の平面プランをなす住居跡である。削平を著しく受け、床面の1部を残すのみである。埋土から土師器片が出土したが、細片ばかりで図示し得なかった。



第7図 2号住居出土土器実測図 (1/3)

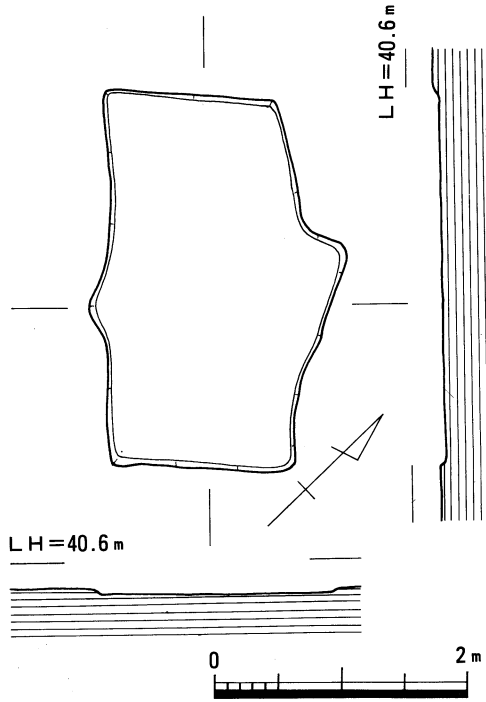
その他の遺構

土壌 (第8図 図版5)

1号住居跡の北西に隣接し、不正長方形の平面プランをなす土壌である。主軸長は3m、幅は2mを測り、主軸方向をN-45°-Wに置く。著しく削平を受け遺構本来の形状は知り得ない。埋土及び床面から土師器が出土している。

出土土器 (第9図 図版13)

1は壺、2は甕であり、ともに遺構の床面から出土した。1は体部を欠損し、復元口径16.2cmを測る。外面は口縁部くびれ部にハケ目調整、口縁部の張り出し部分にキザミ目が観察される。内面の調整等は観察できなかった。2は体部を欠損し、復元口径38cmを測る。外面の調整等は観察できなかったが、内面は口縁部にハケ目調整がみられる。



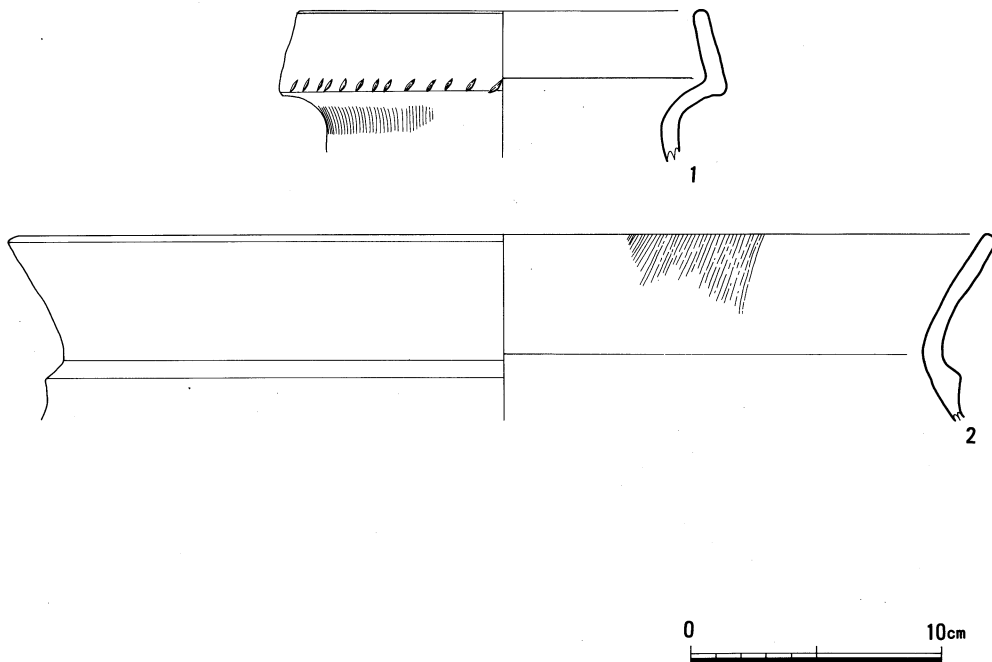
第8図 土壌実測図 (1/60)

土器溜り (図版6)

調整区の南西隅部に位置する。調査区西壁にかかる遺構で中世の環濠にきられている。土層観察で遺構の範囲はさらに西につづいていることがわかる。土師器が多量に出土している。

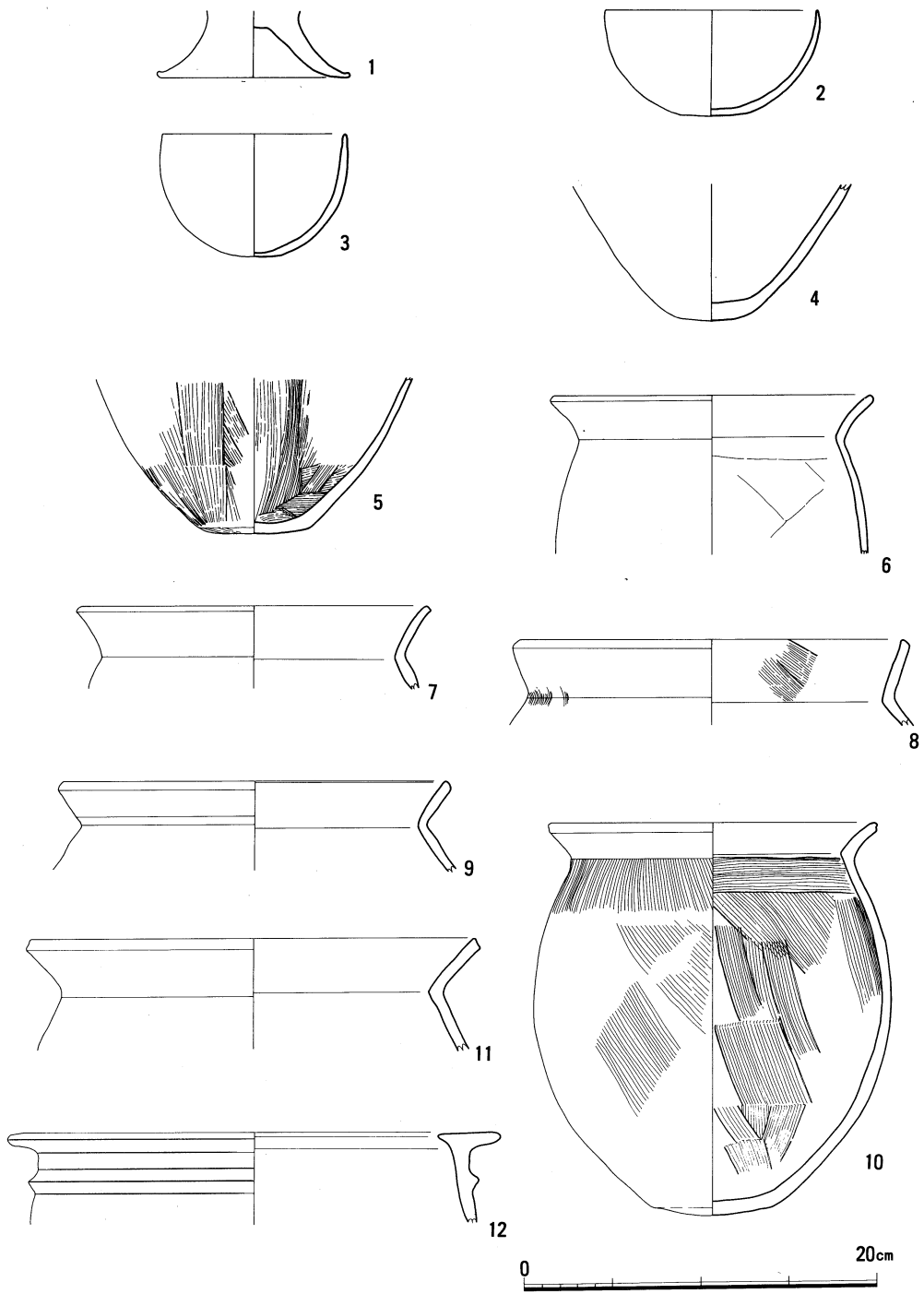
出土土器 (第10、11図 図版13)

1は脚裾部、2、3は椀、4~11は壺、12は甕、13は椀、14~16は壺である。すべて遺構面から出土した。1は杯部、脚柱部を欠損し、外面はヘラ削りの後ナデ、内面もヘラ削りの後ナデである。2は復元口径12cmを測り、口縁部はヨコナデ調整である。3は復元口径10.2cmを測り、口縁部はヨコナデ調整で外面底部から体部にかけてススが附着している。4は壺の底部で体部を欠損する。内外面ともに調整等は観察できなかった。5は壺の底部で体部を欠損する。内外面ともに不定方向にハケ目調整がみられる。6は体部下半を欠損し、復元口径18cmを測る。外面は口縁部から体部にかけてハケ目調整、口縁部はヨコナデ調整である。内面は口縁くびれ部にヨコハケ、体部にヘラ削りの後ナデ、口縁部にヨコナデ調整がみられる。7は体部を欠損し、復元口径19.6cmを測る。内外面ともに調整等は観察できなかった。8は体部を欠損し、復元口径20.8cmを測る。外面は口縁くびれ部にハケ目調整、内面は口縁部にハケ目調整がみられ

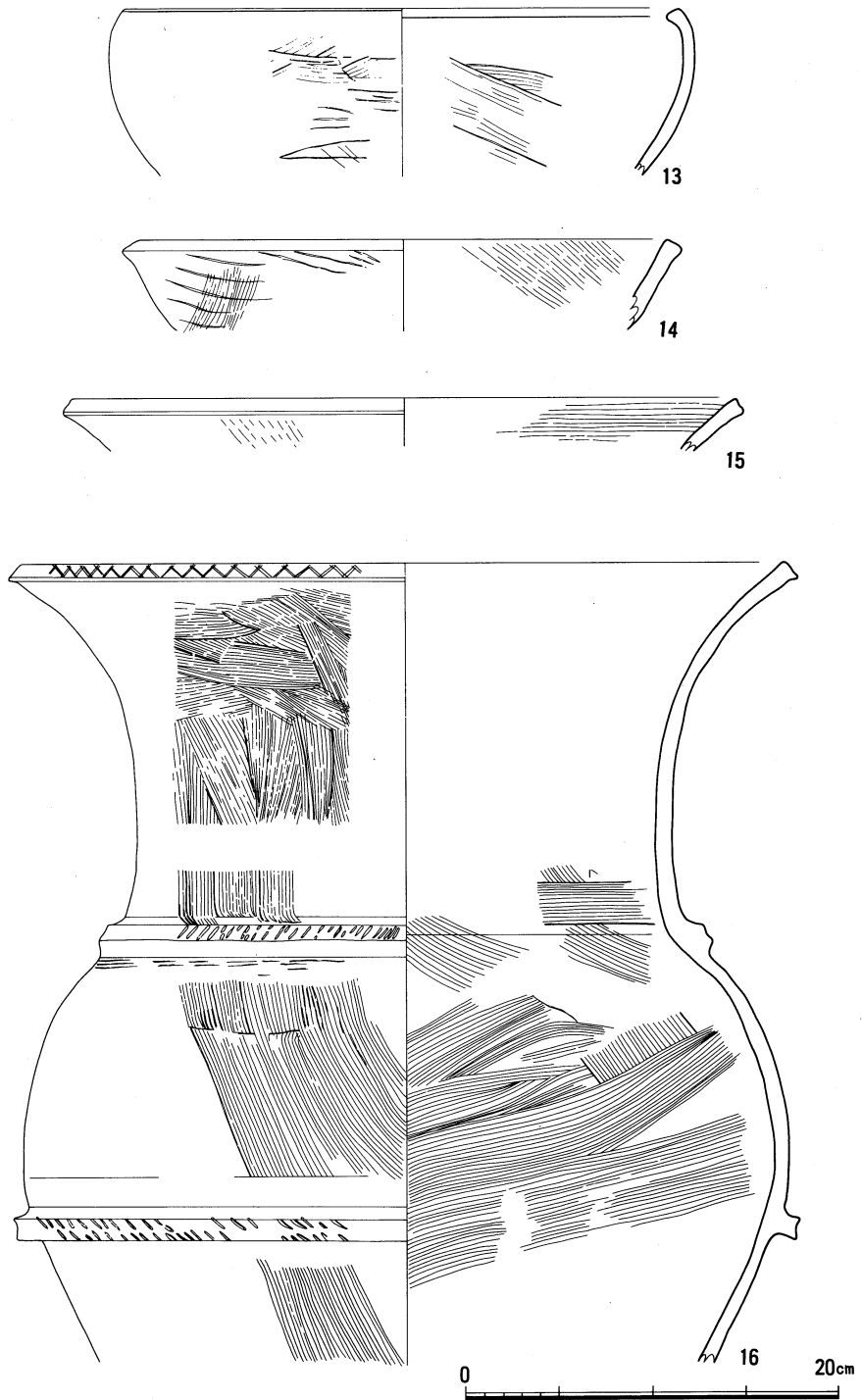


第9図 土壇出土土器実測図 (1/3)

る。9は体部を欠損し、復元口径21.6cmを測る。口縁部内外面にヨコナデ調整がみられる。10はほぼ完形で口径18.3cm、胴径20.2cm、器高22.3cmを測る。外面は体部にハケ目、体部下半にススが付着しているのが観察できる。内面は口縁くびれ部から体部にかけてヨコハケ、体部にはハケ目調整がみられ、口縁部は内外面ともにヨコナデ調整である。11は体部を欠損し、復元口径25cmを測る。口縁部は内外面ともにヨコナデ、口縁くびれ部から体部にかけて内外面ともにハケ目調整がみられる。12は体部を欠損し、復元口径26cmを測る。13は底部を欠損し、復元口径30cmを測る。内外面ともにハケ目調整がみられる。14は体部を欠損し、復元口径18.2cmを測る。外面はヘラミガキ、内面はハケ目調整がみられる。15は体部を欠損し、復元口径35.6cmを測る。内面にヨコハケ調整がみられる。16は底部を欠損し、復元口径50cmを測る。外面はハケ目調整、体部にススの付着しているのが観察できる。内面はハケ目調整である。



第10図 土器溜り出土土器実測図 (1/4)

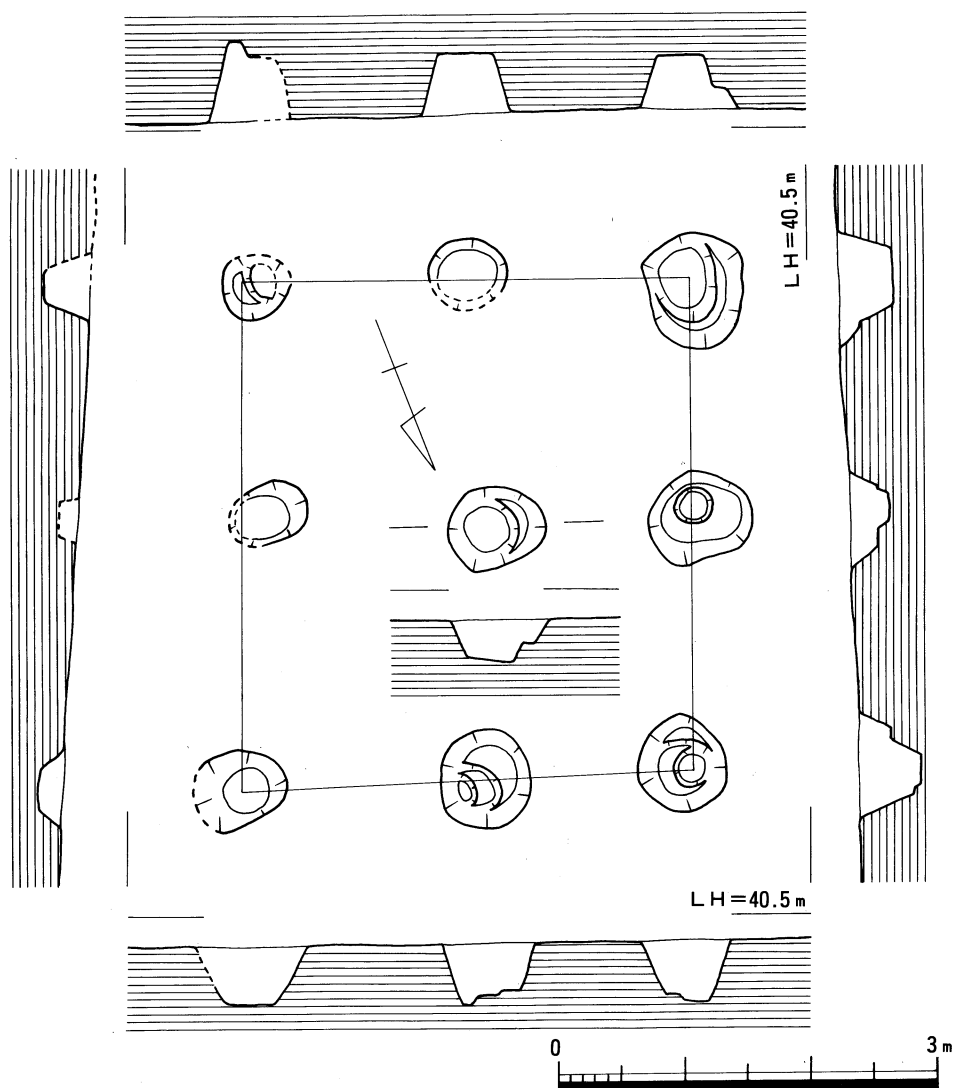


第11図 土器溜り出土土器実測図 (1/4)

B. 歴史時代の遺構・遺物

掘立柱建物

調査区内から奈良時代の掘立柱建物1棟を検出した。この他にも同時代の掘立柱建物の1部と考えられる柱穴を多数検出したが、後世の攪乱・削平を著しく受けているため建物跡として確認するまでには至らなかった。



第12図 掘立柱建物実測図 (1/60)

1号掘立柱建物（第3図 図版7）

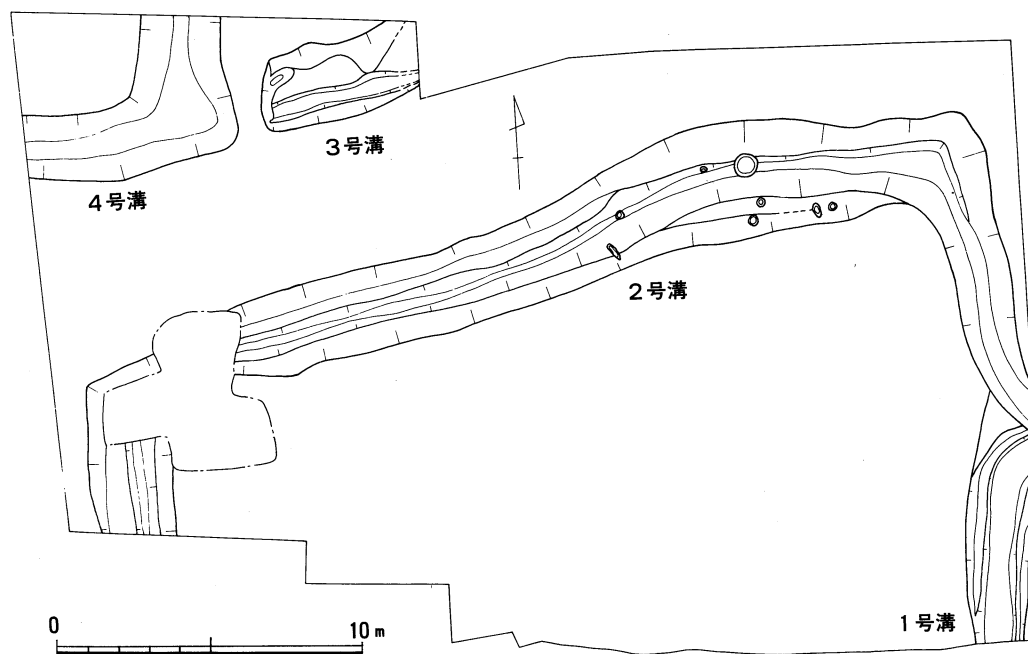
調査区のほぼ中央部に位置し、古墳時代の2号竪穴住居をきり、中世の2号溝にきられている。2間×2間の総柱の掘立柱建物で軸方向をN-21°-Eに置く。柱穴内から須恵器片が出土したが細片ばかりで図示し得なかった。

溝

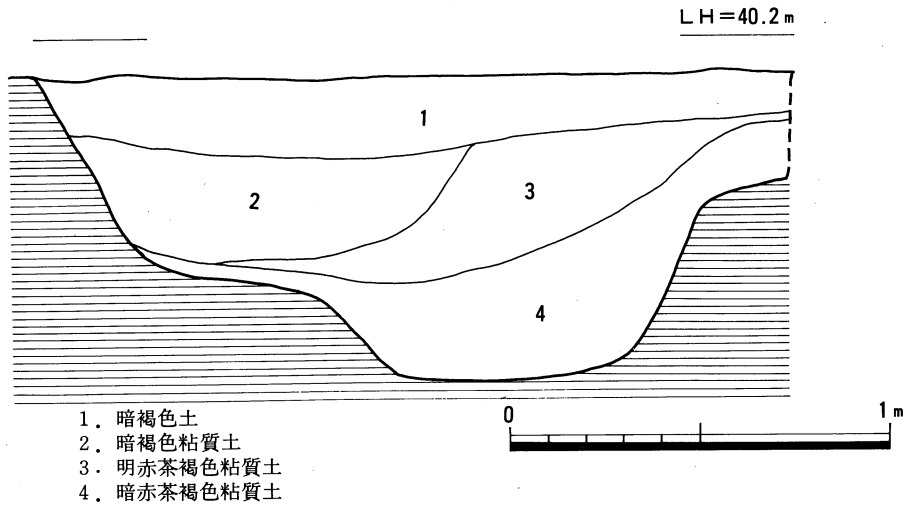
調査区内から中世の溝遺構計4条を検出した。この他に近世から現代に至る溝遺構を検出しているが、ここでは割愛している。

1号溝（第13・14・15図 図版7）

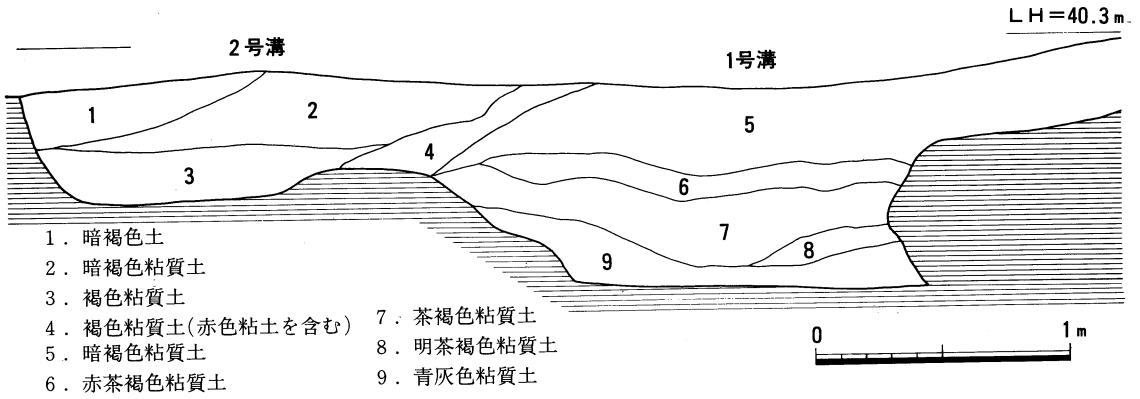
調査区内から検出された4条のうち最も南に位置し、2号溝にきられている。現存幅2m、深さ0.8mを測る。遺構上部が後世の削平を受けているため本来の形状は知り得ないが断面は2段掘りの逆台形状を呈している。土層観察では1層に暗褐色土、2層に暗褐色粘質土、3層に明赤茶褐色粘質土、4層に暗赤茶褐色粘質土が堆積していることが確認され、遺構は調査区の西から埋土が堆積して行ったことがわかる。カクラン層からは須恵器片、陶磁器、土師皿、4層からは土師皿が出土している。遺構は調査区外に向って湾曲していることから、2号溝と同じように環濠をめぐるしていた可能性がある。



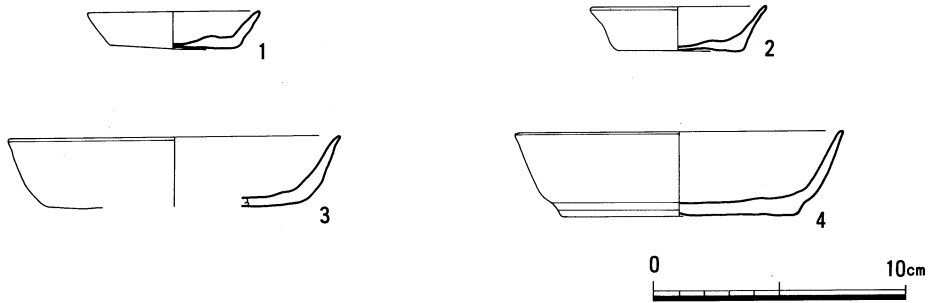
第13図 溝遺構配置図 (1/250)



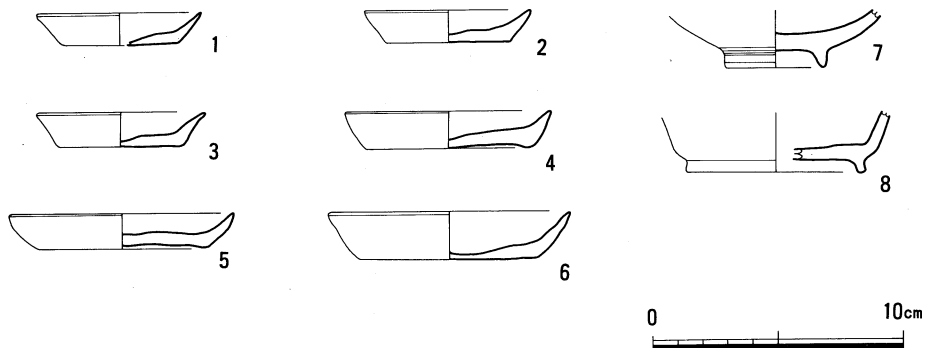
第14図 1号溝土層図 (1/20)



第15図 1・2号溝間の土層図 (1/30)



第16図 1号溝4層出土土器実測図 (1/3)



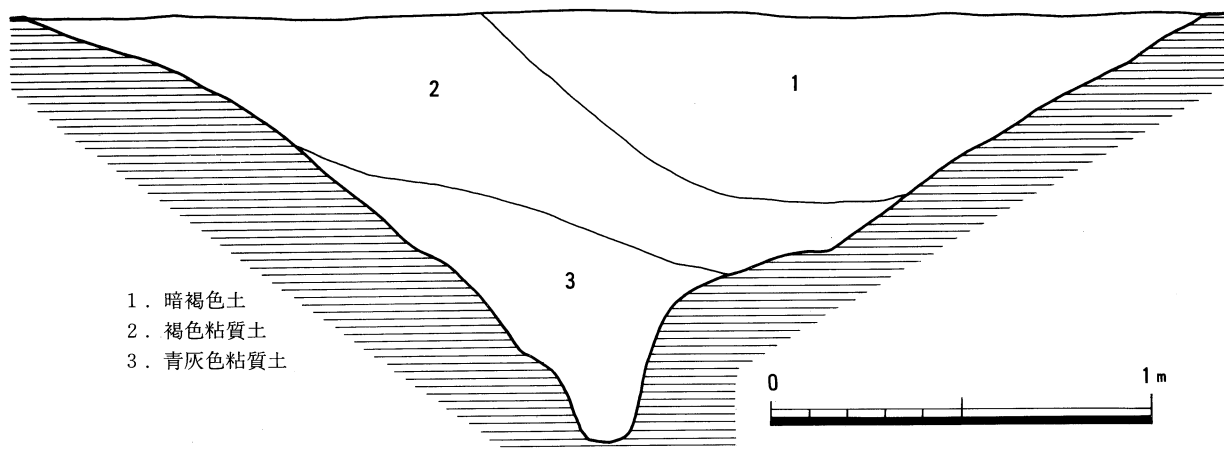
第17図 1号溝攪乱層出土土器実測図 (1/3)

4層出土土器 (第16図 図版14)

1、2は小皿、3、4は坏でいずれも4層から出土した。1は復元口径6.8cm、器高1.5cm、底径5cmを測る。内面は内底部から体部立ち上がり部分にかけてナデ、体部から口縁部にかけてヨコナデ調整である。外面は口縁部から体部にかけてヨコナデ調整、外底部は糸切り底で板状圧痕はない。2は復元口径7cm、器高1.7cm、底径4.8cmを測る。内面は内底部から体部立ち上がり部分にかけてナデ、体部から口縁部にかけてヨコナデ調整である。外面は口縁部から体部にかけてヨコナデ調整、外底部は糸切り底で板状圧痕はない。3は復元口径13.2cm、器高2.8cm、底径10cmを測る。内面は内底部から体部立ち上り部分にかけてナデ、体部から口縁部にかけてヨコナデ調整である。外面は口縁部から体部にかけてヨコナデ調整、外底部は糸切り底で板状圧痕はない。4は復元口径13cm、器高3.4cm、底径9.2cmを測る。内底部から体部外面にかけてヨコナデ調整である。外底部は糸切り底で板状圧痕はない。

攪乱層出土土器 (第17図 図版14)

1～6は土師皿、7は陶磁器、8は須恵器である。1は復元口径6.5cm、器高1.3cm、底径4.6cmを測る。2は復元口径6.5cm、器高1.3cm、底径4.8cmを測る。3は復元口径6.5cm、器高1.4cm、底径4.8cmを測る。4は復元口径8cm、器高1.5cm、底径6.4cmを測る。5は復元口径8.8cm、器高1.4cm、底径6.7cmを測る。6は復元口径9.5cm、器高1.9cm、底径6.9cmを測る。7は高台で底径3.8cmを測る。8は坏で底径7cmを測る。1～5は内底部から体部外面にかけてヨコナデ調整である。外底部は糸切り底で板状圧痕はない。6の内面は内底部から体部立ち上り部分にかけてナデ、体部から口縁部にかけてヨコナデ調整である。外面は口縁部から体部にかけてヨコナデ調整、外底部は糸切り底で板状圧痕はない。7、8は遺存状況が悪く、調整等の観察はできなかった。



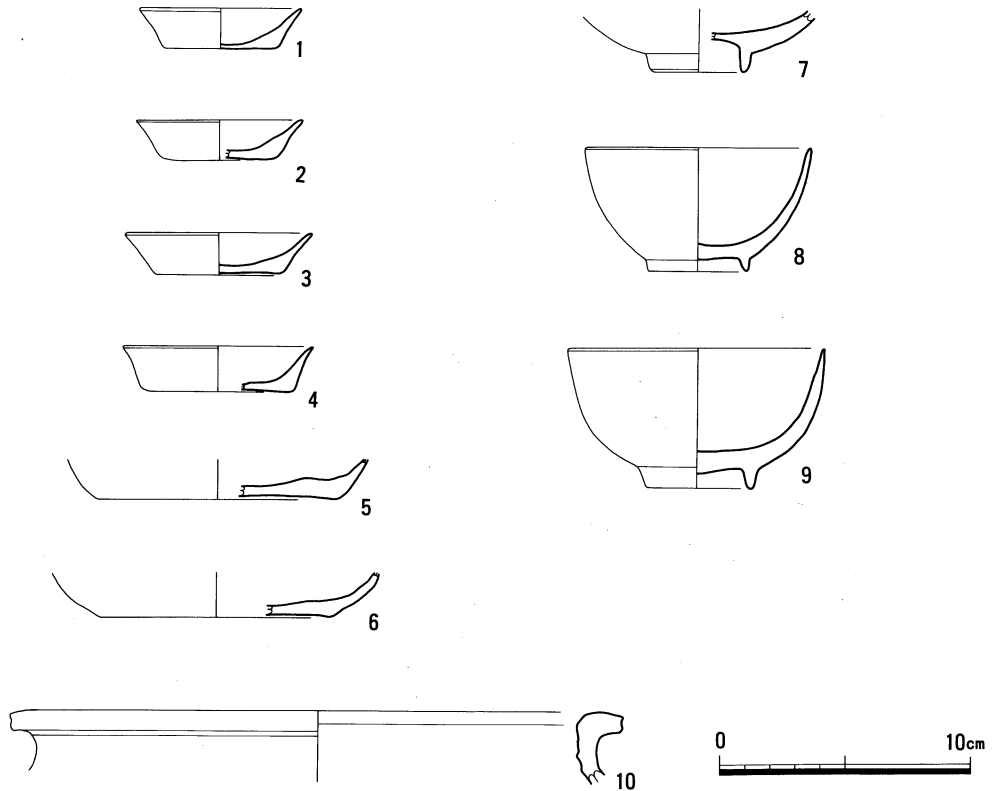
第18図 2号溝土層図 (1/20)

2号溝 (第13・18図 図版10)

調査区のほぼ中央部に位置し、1号溝をきっている。現存幅3m、深さ1.1mを測る。平面プランから1辺約30mの環濠と考えられる。遺構上部が後世の削平を受けているため本来の形状は知り得ないが、断面はV字型を呈している。溝よりも堀というべき性格のものであろう。土層観察では1層に暗褐色土、2層に褐色粘質土、3層に青灰色粘質土が堆積していることがわかる。また遺構は環濠領域内から埋土が堆積して行ったことがわかる。1層からは土師皿片、陶磁器片、2層からは陶磁器、土瓶、3層からは土師皿が出土している。

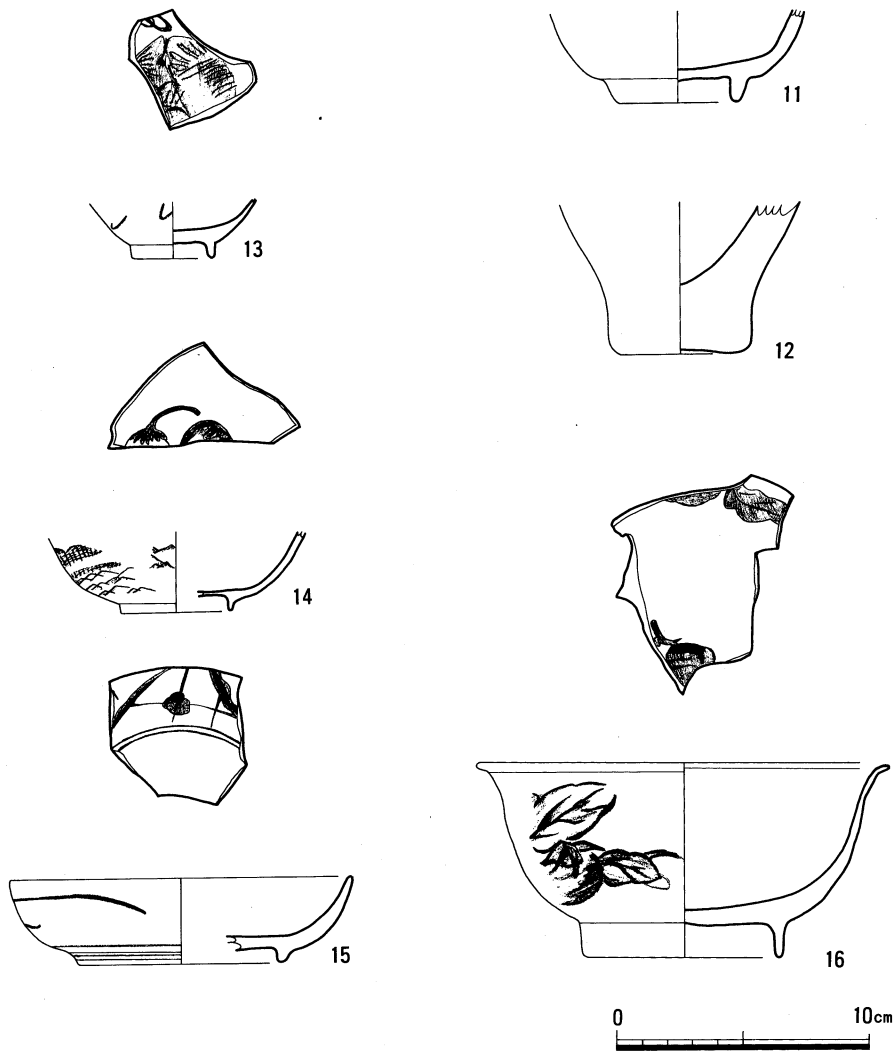
1層出土土器 (第19・20図 図版15)

1～6は土師皿、7～9、11は陶磁器碗、10は陶器、12は弥生時代の土器、13～16は染付碗である。1は復元口径6.3cm、器高1.6cm、底径4.4cmを測る。2は復元口径6.6cm、器高1.6cm、底径4.4cmを測る。3は復元口径7.2cm、器高1.7cm、底径4.8cmを測る。4は復元口径7.4cm、器高1.7cm、底径5.7cmを測る。5は口縁部を欠損し、復元底径9.5cmを測る。6は口縁部を欠損し、復元底径9cmを測る。5の内面は内底部から体部立ち上り部分までナデがみられる。外面は体部にヨコナデ、外底部は糸切り底で板状圧痕はない。1～4と6は内底部から体部外面にかけてヨコナデ、外底部は糸切り底で板状圧痕はない。7は高台部で体部を欠損し、復元底径3.6cmを測る。胎土は淡黄茶色を呈し、底部をのぞいて全面に釉がかかっている。外面及び内面は無文である。8は復元口径8.8cm、器高4.9cm、底径2.8cmを測る。胎土は明灰白色を呈し、たたみつき部分をのぞき全面に釉がかかっている。口縁はやや開きながらまっすぐにのびる。内面及び外面は無文ではあるが、外面の体部から外底部にかけて若干の貫入がみられる。9は復元口径10cm、器高5.5cm、底径4cmを測る。胎土は明灰白色を呈し、全面に釉がかかり、特に口縁部には鉄釉がみられる。内面及び外面は無文である。10は壺の口縁部で体



第19図 2号溝1層出土土器実測図 (1/3)

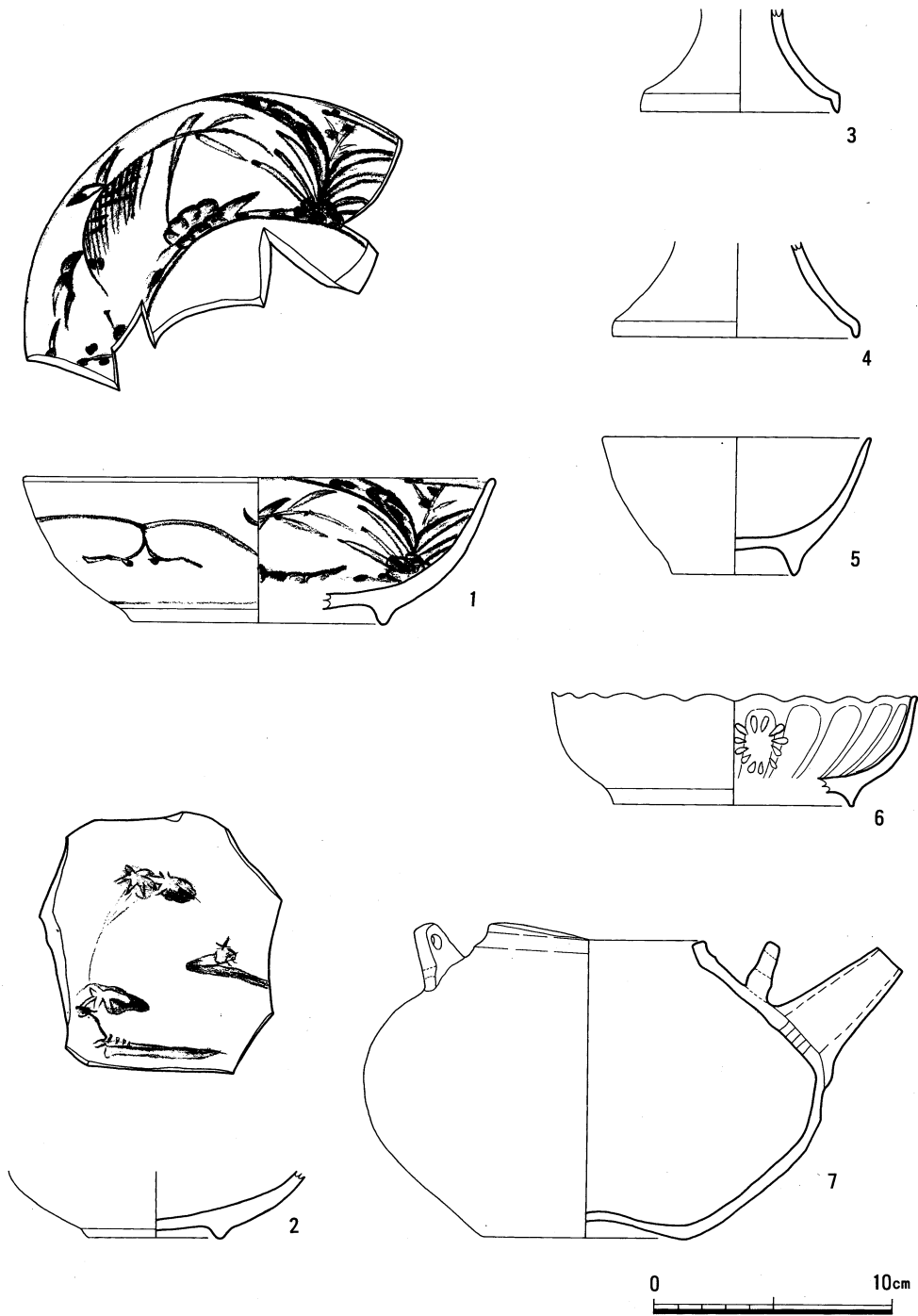
部を欠損し、復元口径22.6cmを測る。胎土は明茶褐色で焼成は良くない。体部の残存部分の内面及び外面に釉がみられる。11は高台部で体部を欠損し、復元底径4.8cmを測る。胎土は灰白色を呈し、たたみつき部分を除き全面に釉がかかる。外面は高台部分に貫入がみられる。12は弥生時代の壺の底部で復元底径4.6cmを測る。摩耗が著しく調整等は観察できなかった。13は高台部で体部を欠損し、復元底径3cmを測る。胎土は灰白色を呈し、全面に釉がかかる。14は体部及び底径を欠損し、復元底径4.2cmを測る。胎土は灰白色を呈し、全面に釉がかかる。15は底部を欠損し、復元口径13.4cm、器高3.4cm、底径7.8cmを測る。胎土は灰白色を呈し、たたみつき部分を除き全面に釉がかかる。16は復元口径16.2cm、器高7.7cm、底径7.8cmを測る。胎土は灰白色を呈し、たたみつき部分を除き全面に釉がかかる。口縁部はやや反している。



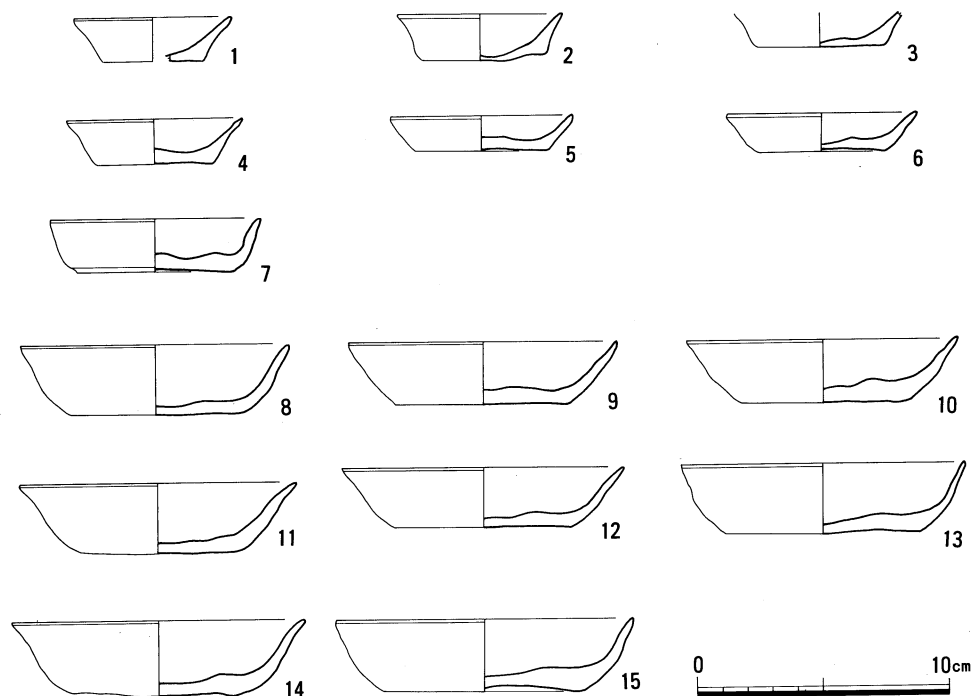
第20図 2号溝1層出土土器実測図 (1/3)

2層出土土器 (第21図 図版15)

1～2は染付碗、3～6は陶磁器、7は土瓶である。1は底部を欠損し、復元口径19.6cm、器高6.1cm、底径10.4cmを測る。胎土は灰白色を呈したたみつき部分を除き全面に釉がかかる。2は体部を欠損し、復元底径5.6cmを測る。胎土は灰白色を呈し、たみつき部分を除き全面に釉がかかる。3は脚部で復元底径8.2cmを測る。胎土は明青灰色で全面に釉がかかる。内・外面ともに無文である。4は脚部で復元底径10cmを測る。胎土は青灰色で全面に淡緑色の釉が



第21图 2号沟2层出土土器实测图 (1/3)

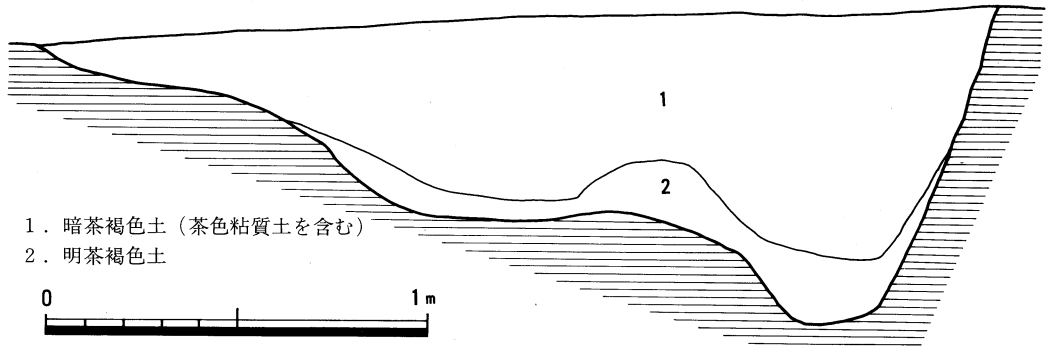


第22図 2号溝3層出土土器実測図 (1/3)

かかる。内・外面ともに無文である。5は碗で復元口径11.2cm、器高5.8cm、底径5.6cmを測る。胎土は淡灰色でたたみつき部分を除き全面に淡緑色の釉がかかる。内・外面ともに無文で貫入がみられる。6は底部を欠損し、復元口径15cm、底径10cmを測る。胎土は灰白色で全面に淡緑色の釉がかかる。7は蓋を欠損し、口径8.8cm、器高13.4cm、胴径19.1cm、底径8.4cmを測る。底部から胴部にかけてのみ緑色の釉を欠きススが付着する。このことから、薬を煎じるために使用されたと考えられるが、この類の土瓶が後産埋納容器として近世墓から出土していることを考慮すると、後産埋納容器として埋められた可能性もある。

3層出土土器 (第22図 図版15)

1～15はすべて土師皿である。1は底部の1部を欠損し復元口径6.1cm、器高1.9cm、底径4.4cmを測る。2は復元口径6.3cm、器高1.9cm、底径5cmを測る。3は口縁部を欠損し復元底径5.2cmを測る。4は復元口径6.9cm、器高2.8cm、底径4.6cmを測る。5は復元口径7cm、器高1.4cm、底径5.3cmを測る。6は復元口径7.3cm、器高1.6cm、底径5.1cmを測る。7は復元口径8.1cm、器高2.1cm、底径6.2cmを測る。8は復元口径10.6cm、器高2.8cm、底径7



1. 暗茶褐色土（茶色粘質土を含む）
2. 明茶褐色土

第23図 3号溝土層図 (1/20)

cmを測る。9は復元口径10.6cm、器高2.5cm、底径7cmを測る。10は復元口径10.7cm、器高2.5cm、底径6.5cmを測る。11は復元口径11cm、器高2.8cm、底径6cmを測る。12は復元口径11.2cm、器高2.4cm、底径7cmを測る。13は復元口径11.2cm、器高2.8cm、底径7.8cmを測る。14は復元口径11.6cm、器高3cm、底径6.5cmを測る。15は復元口径11.8cm、器高2.9cm、底径7.7cmを測る。3、7、8～15の内面は内底部から体部立ち上り部分までナデ、体部から口縁部までヨコナデ調整である。外面は口縁部から体部にかけてヨコナデ調整、外底部は糸切り底で板状圧痕はない。1、2、4～6の外底部は糸切り底で板状圧痕はない。他の部分はすべてヨコナデ調整である。

3号溝 (第13、23図 図版12、16)

調査区の北端部に位置し、4号溝に隣接する。現存幅2.5m、深さ0.8mを測る。遺構上部が後世の削平を受けているため本来の形状は知り得ないが、断面は不正逆三角形を呈している。土層観察では1層に暗茶褐色土、2層に明茶褐色土が堆積していることが確認され、遺構は北から埋土が堆積して行ったことがわかる。このことから、調査区外北に領域を持つ環濠の1部であった可能性がある。遺構から陶磁器片などの遺物を出土したが細片ばかりで図示し得なかった。

4号溝 (第13図 図版16)

調査区の北西角部に位置し、3号溝に隣接する。現存幅2.6m、深さ0.6mを測る。検出された溝4条のうち最も後世の削平を受け本来の形状は知り得ないが、断面はV字型を呈し2号溝と類似する。溝よりも堀というべき性格のものであろう。土層観察では暗茶褐色土のみ堆積する。遺構は調査区外西に領域を持つ環濠の角部と考えられる。遺構から陶磁器片等の遺物を出土したが細片ばかりで図示し得なかった。

(3) まとめ

① 弥生～古墳時代

今回の調査で注目に値する成果の1つは、古墳時代前期の雷山川西岸における集落の分布を探る手掛かりを得たことである。

雷山川西岸地域ではあまり調査が行なわれておらず、唯一、上籙子遺跡から100棟の集落を検出したにすぎなかった。その遺構群も時代的には弥生時代後期と古墳時代後期のもので、古墳時代前期から中期にかけての集落の動向が不明のままであった。しかし、本調査で小規模ではあるものの、弥生時代後期から古墳時代前期の住居跡等の遺構が検出されたことはその空白期を埋める上で重要な資料の1つとなり得ると思われる。

検出された4棟の竪穴住居は本文でも説明した様に後世の削平が著しく、最も遺存状況の良い2号住居でさえベッド状遺構を確認するのがやっとの状態、その構造上の特徴など確認するまでには至らなかった。ただし、各遺構の主軸方向が一定でなく、また切り合い関係がみられることから数回にわたり住居が建てられ生活が営まれたことは想定し得る。土器溜りも調査区外にひろがっており、これも住居跡となり得る可能性がある。

なお、本文中で遺構及び出土遺物の時期について説明できなかったのでここで説明を加えたいと思う。

まず、1号及び2号住居の床面から出土した甕は口縁部が若干内傾しており、高杯の脚柱が中ぶくらのエンタシス状を呈していることから柳田康雄氏の^{注①}編年によるとII bからII c式に位置づけられる。3号及び4号住居の床面から出土した甕も口縁部が内傾していることからII bからII c式に位置づけられる。土壙から出土した複合口縁壺は口縁部が外反し始めS字状を呈し、柳田氏の^{注②}編年によると弥生時代の後期5式に位置づけられる。土器溜りから出土した甕の底部は丸底化の徴候を示す凸レンズ状底であることから同氏の編年によると弥生時代の後期4式に位置づけられる。以上から、4棟の竪穴住居は4世紀前半から4世紀中頃、土壙及び土器溜りは2世紀前半から3世紀前半の年代が与えられるであろう。

② 歴史時代

歴史時代で注目すべき成果の1つは糸島地方における中世の動向を探る手掛かりを得たことである。今日までの調査で、東五反田遺跡、東高田遺跡、東下田遺跡から中世環濠遺構を検出しているが、いずれも長野川流域からであった。そのため、長野川流域以外の地域における中世の状況が不明のままであった。しかし、本調査で小規模ではあるものの、雷山川西岸地域で

中世環濠遺構を検出し得たことは今後の糸島地方における中世を探る上で重要な資料の1つとなり得ると思われる。

検出されたのは計4条の溝である。その中において環濠として確認できるのは2号溝であることから、この遺構についてまとめておわりとする。この遺構に関して注目すべきことは遺構がとり囲む領域の端部から1～2mほど空間地帯がみられることである。また、その空間地帯の一角に1間×1間、その幅約2mの掘立柱建物も認められる。このことから、遺構がとり囲む領域に土塁がめぐり、その一角に掘立柱建物があった可能性がある。ただし、遺構がとり囲む領域内から同時期の住居跡を検出し得ていないため「古屋敷」という小字名の如く屋敷の跡か否かは不明である。今後の資料の増加を待ち再検討する必要がある。

なお、本文中で遺構及び出土遺物の時期について説明できなかったのでここで説明を加えたいと思う。まず、掘立柱建物は柱穴から高台付須恵器杯片が出土しており舟山良一氏の編年ではVI期に位置づけられる。1号溝は最下層から土師皿を出土している。いずれも外底部は糸切り底で板状圧痕がない。内面はナデ調整を行なうものと横ナデ調整のみで仕上げるものがあることから山本信夫氏の編年ではXIX～XX期に位置づけられる。2号溝は3層から土師皿を出土している。いずれも外底部は糸切り底で板状圧痕がない。内面はナデ調整を行なうものと横ナデ調整のみで仕上げるものがあることから山本編年ではXIX～XX期に位置づけられる。2層からは染付碗、陶磁器、土瓶が出土し大橋康二氏の編年ではIV～V期に位置づけられる。1層からは陶磁器片が出土し、大橋編年でV期以降に位置づけられる。3号溝は最下層から寛永通宝が出土している。4号溝は攪乱土中から大橋編年でIII期に相当する陶磁器が出土している。以上から、掘立柱建物は7世紀後半、1号溝は14世紀から15世紀代、3号溝は17世紀前半、4号溝は17世紀中頃の年代が与えられよう。特に2号溝は3層に分かれており、そのうち3層は14世紀から15世紀代、2層は17世紀末から18世紀後半、1層は19世紀代の年代が与えられ、この遺構が完全に埋没するまでかなりの時間を要したことがわかる。

参考文献

- 注①、柳田康雄『古墳時代の研究』第6巻（雄山閣出版・1991年）
- 注②、柳田康雄『弥生文化の研究』第4巻（雄山閣出版・1987年）
- 注③、舟山良一『古墳時代の研究』第6巻（雄山閣出版・1991年）
- 注④、山本信夫「統計上の土器—歴史時代土師器の編年研究によせて—」（『九州上代文化論集—乙益重隆先生古稀記念論文集—』・1990年）
- 注⑤、大橋康二『肥前陶磁』（ニュー・サイエンス社・1989年）

2. 高祖金口遺跡(2次)の調査

(1) 位置と環境

高祖金口遺跡は前原市大字高祖 814 番地に所在する。東に川原川、西に赤崎川の中小河川に挟まれた南北に延びる長さ1400 m、幅400 mの舌状低丘陵の先端部に位置し、両河川は遺跡の北約350 mの地点で合流する。赤崎川を挟んで西側は古代「伊都国」の中心地である三雲・井原遺跡群の中核部であり、弥生時代中期の王墓として著名な三雲南小路遺跡(柳田1985)や前期の前方後円墳である端山古墳、築山古墳(柳田・小池 1982)などがある。川原川を挟んで東側には高祖山(標高416 m)の山麓に奈良時代の山城である国指定史跡「怡土城跡」がある。城域面積は260万㎡におよび土塁、望楼跡、倉庫等が確認されている。広大な城域内には前期の小型前方後円墳である高祖東谷1号墳(岡部 1991)や後期の群集墳も存在する。高祖榎町遺跡からは弥生時代中期の甕棺墓も検出されており、この近辺でも同期の集落の存在が想定されるようになった。南には豊富な武器、馬具等を出土した後期古墳の古賀崎古墳(岡部 1986)、古墳時代前期～中期の集落である井原ムクナシ遺跡(林 1990)、井原塚廻遺跡(林 1992)が存在する。

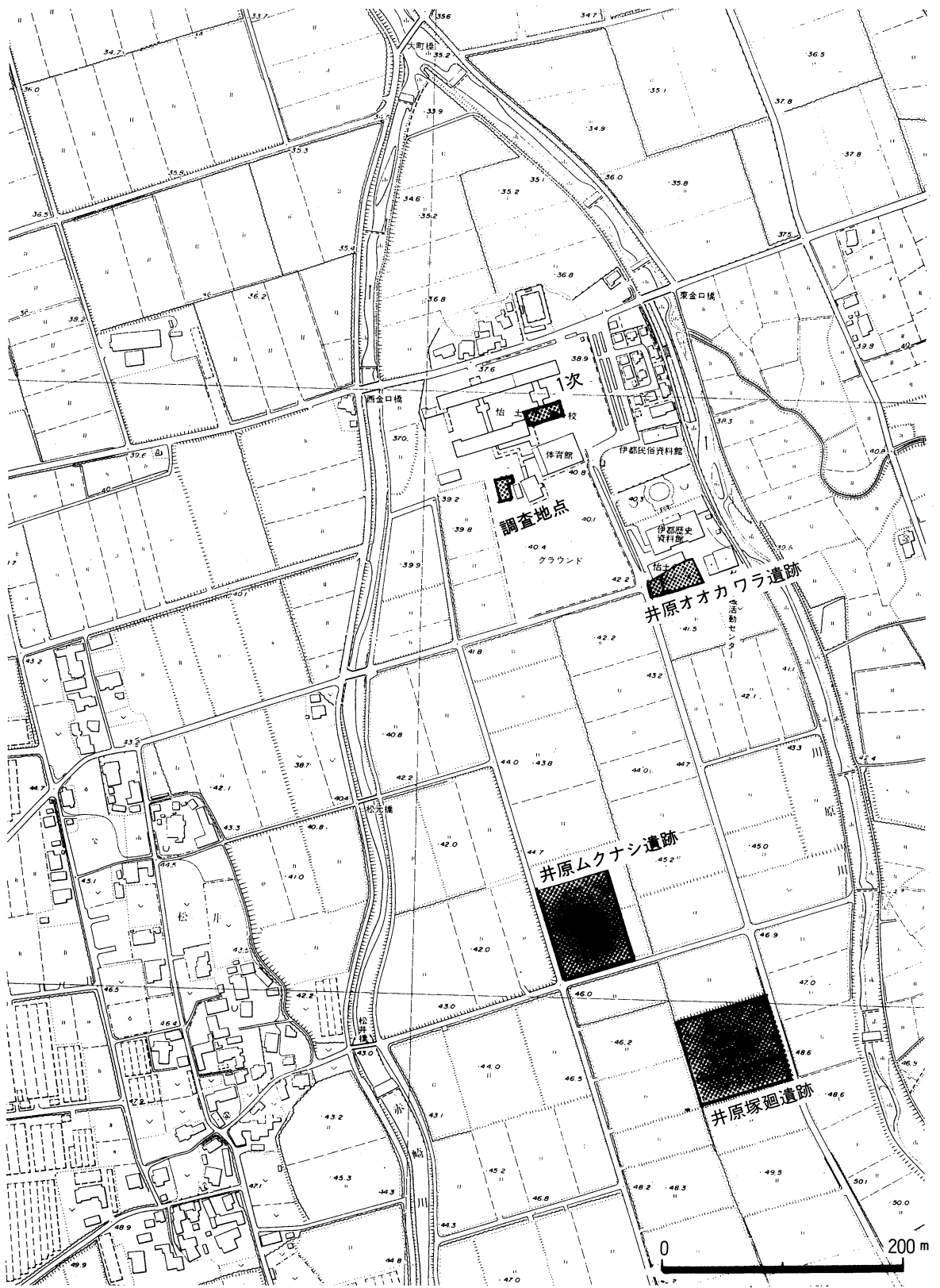
(2) 平成4年度の調査成果

調査地点は運動場の北西隅にあたり以前は水田であった所で、運動場造成の際に約80cmの盛土(真砂土、一部暗黄褐色砂質土)が行われていた。調査区西半分は溝状の攪乱が縦横に走っており遺構は検出されなかった。また北東側の拡張した部分では建物の基礎(旧怡土中学校の校舎か?)が検出され、ここも攪乱を受けていることが判明した。結局調査区内で旧状を止めていたのは東側半分であったが、検出された遺構はわずかに溝数条のみであった。層序は盛土下では黒灰褐色土層(耕作土)、黒灰褐色土+黄灰褐色土、暗灰褐色土層、黄灰褐色土層(地山)ある。

溝 7条+αを検出した。幅15~20cmで、深さ5~10cmである。いずれもほぼ南北方向に直線



第24図 竣工した大食堂(平成5年3月)

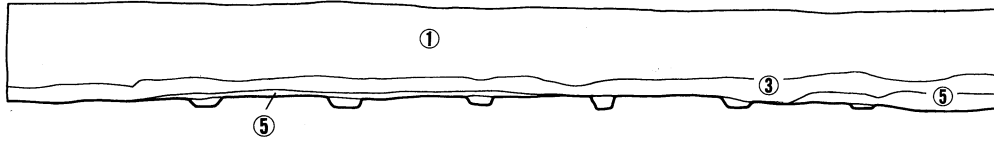


第25図 遺跡周辺の地形 (1/5,000)

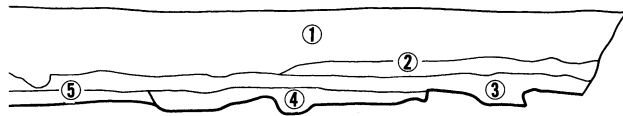


第26図 調査区全体図 (1/150)

標高40.50 m



標高40.50 m



- ①真砂土
- ②暗黄褐色砂質土 } 客土
- ③黒灰褐色土
- ④黒灰褐色土+黄灰褐色土
- ⑤暗灰褐色土

0 2 m

第27図 南壁土層断面実測図 (1/80)

的に延びており、それぞれ1.3 m程の等間隔で並行している。溝と溝の間にも数ヶ所に短い溝が存在する。出土遺物は須恵器、土師器、青磁、褐釉陶器、磁器（染付）等が出土しているがいずれも細片で図示しえなかった。また、量的にもごくわずかである。その他に鉄滓が2点出土している。時期は近世であろう。

その他暗灰褐色土層からも同様の遺物が出土している。また、西側の攪乱埋土からは弥生中期の甕の口縁部の破片が出土している。

(3) まとめ

今回の調査の目的のひとつに1次調査(川村 1988)で検出されている古墳時代の住居跡や突帯文土器の包含層の広がりを確認することがあった。しかし、前述のとおりそれに関連する遺構は確認することができず、わずかに出土遺物のなかに同期の須恵器の破片を確認したのみである。遺構の検出面の標高は1次調査地点に較べ1.5 m程高いが、あるいは削平されてしまったのであろうか。調査地点の南約400 mの井原ムクナシ遺跡(林 前掲)では古墳時代前期末～中期の住居跡、さらに南約100 mの井原塚廻遺跡(林 前掲)では布留式の最新段階の住居跡が検出されている。赤崎川と川原川に挟まれたこの地域の古墳時代の集落がどのように展開していったのか、今後の調査の課題である。

(引用文献)

- 岡部裕俊 1986 『古賀崎古墳』前原町教育委員会
- 岡部裕俊 1991 『井原遺跡群』前原教育委員会
- 川村 博 1988 『高祖遺跡群』前原町教育委員会
- 柳田康雄 1985 『三雲遺跡南小路地区編』福岡県教育委員会
- 柳田康雄・小池史哲編 1982 『三雲遺跡Ⅲ』福岡県教育委員会
- 林 覚 1990 『井原ムクナシ遺跡』前原町教育委員会
- 林 覚 1992 『井原塚廻遺跡』前原町教育委員会

(註)

平成3年度前原町教育委員会により調査、現在整理中

付 載

蔵持古屋敷遺跡出土資料補遺

蔵持古屋敷遺跡は昭和33年(1958年)に旧雷山公民館建設工事の際に鉄器や土器が発見されたことから、周知の遺跡として知られることとなった。残念ながら発見当時は遺跡の詳細について公に証されることはなかったものの、出土資料の一部が故原田大六氏によって復元され、紙上で紹介されたこともある。^{註1}

本項では当時出土した遺物のうち現在伊都歴史資料館で保管しているものについて紹介し、調査成果に添えたい。今回示した資料は計6点であるが、この他にも当遺跡出土の可能性のある広口壺1点、器台2点が保管されていることも付記しておく。以下に概略を述べる。

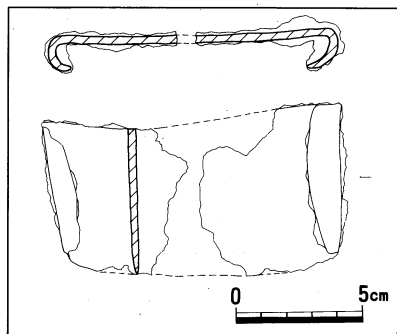
鉄鍬(鋤)先(第28図) 中央部で縦方向に欠損しているため、正確な寸法はわかりかねるが、現在は長さ7.8cm、幅11.8cmに復元されている。鉄板の両端を折り曲げて袋部をなす。現状では鍬、鋤のいずれに装着されたのか、判断は難しい。

土器(第29図) 1は高杯である。杯部は口縁が大きく外反している。脚は長脚ぎみで裾部は欠失している。2は複合口縁壺である。接合によってほぼ完形に復している。器高44.2cm、口縁径34.4cm、胴部最大径30.8cmを計り、口縁径が胴部の径を上回る。胴部外面下半はヘラケズリ調整が施され、底部は平坦面を残してはいるものの、縁が丸みを帯びている。原田の所見によれば甕棺とされる。木あるいは石蓋を被せた小児用の単棺だったのだろうか。内外面とも赤色顔料が塗布された痕跡は認められない。3は甑、4は甕、5は支脚である。3は尖り気味の底部に径1.5cmほどの円孔が設けられている。4は器壁が厚く仕上げられており、口縁部は内湾して立ち上がってきた胴部から心持ち直立して収束する。

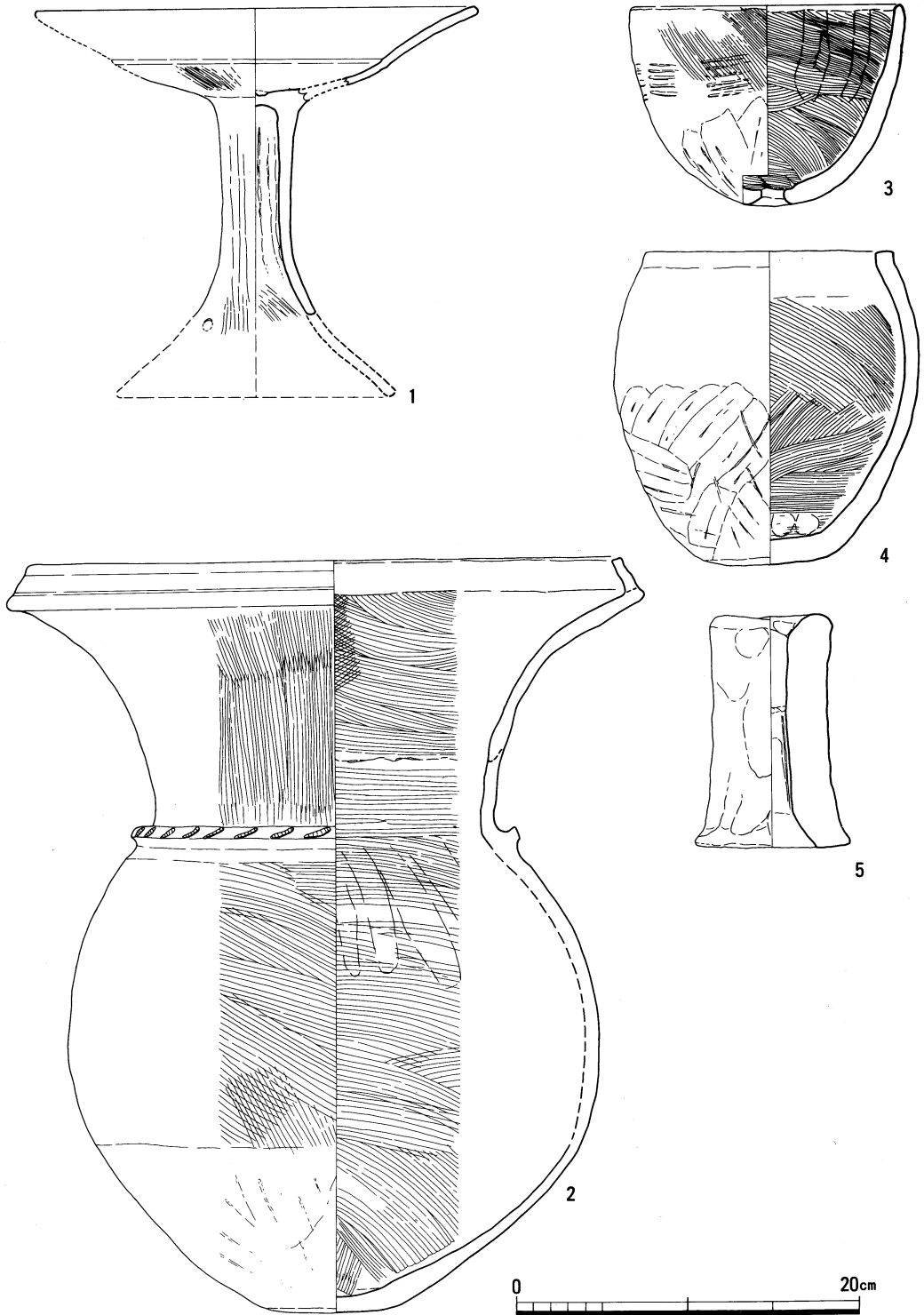
結び

これらの土器はいずれも弥生終末期の範疇でとらえられるものである。今回の発掘調査によって当地一帯に弥生後期～古墳前期の集落遺跡が存在することが明らかとなったが、本項で紹介した資料もその成果を追認するものである。

註1 原田大六『伊都国王墓展』1966年



第28図 伊都歴史資料館保管資料
実測図①(1/3)

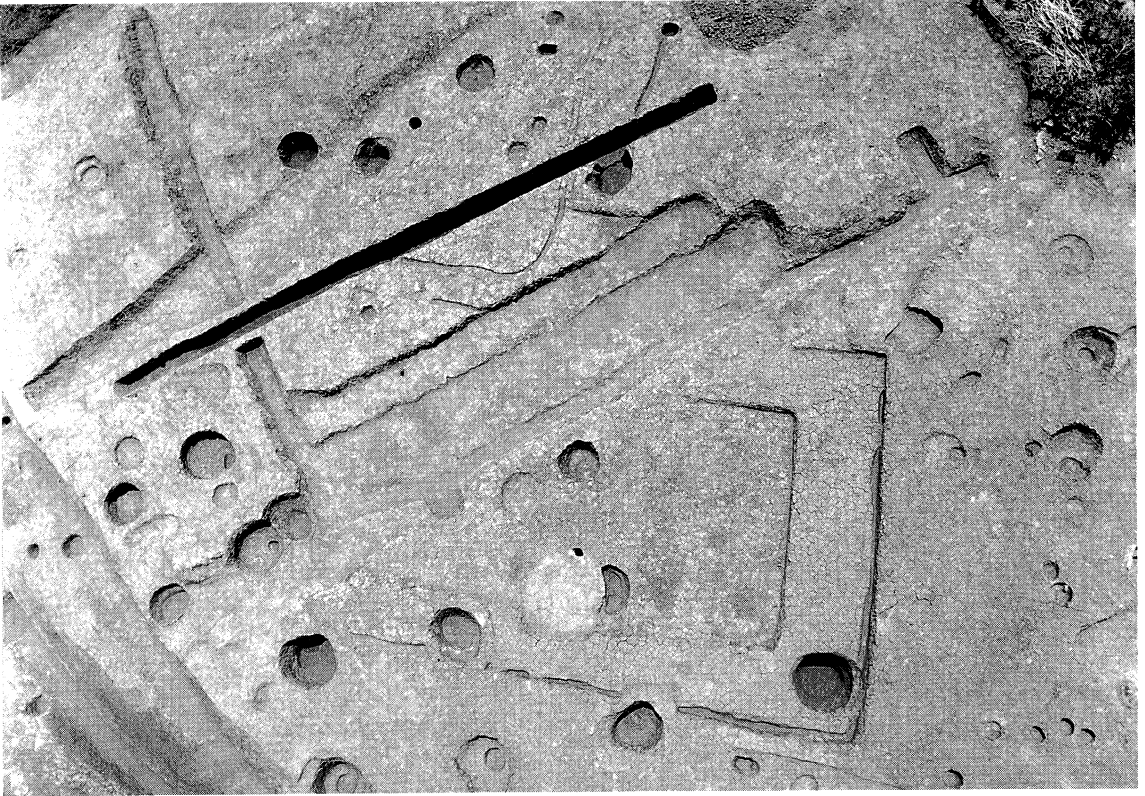


第29図 伊都歴史資料館保管資料実測図② (1/4)

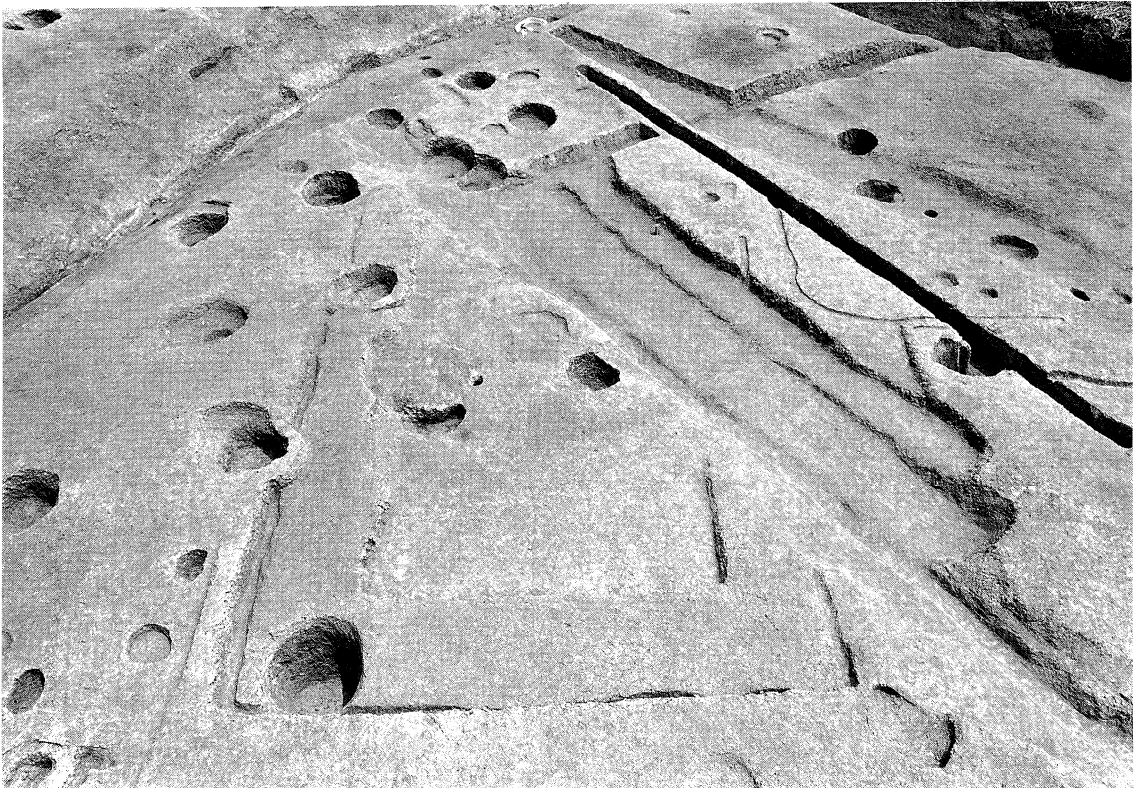
版 図



藏持古屋敷遺跡調査地点全景（西部）



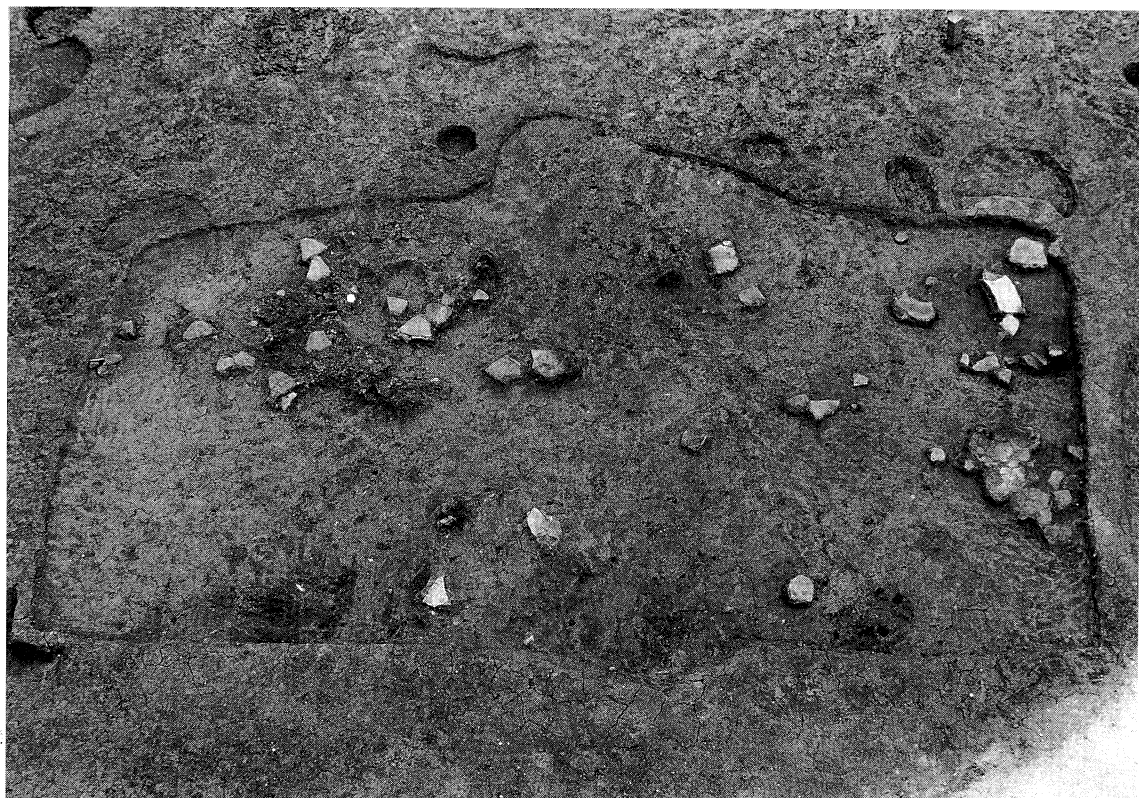
a. 2号住居 (上から)



b. 2号住居 (南西から)



a. 3号住居(南西から)



b. 土 壙 (南西から)



a. 土器溜り (北から)



b. 土器溜り (近景)



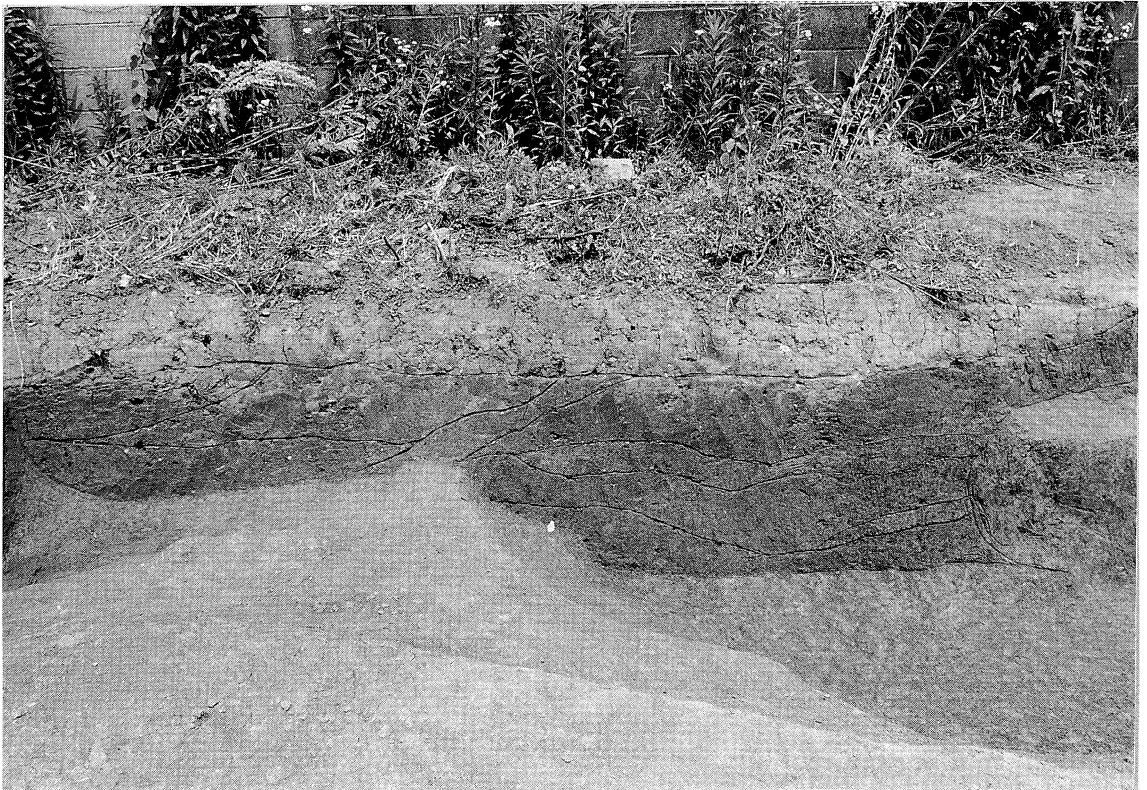
a. 1号掘立柱建物（東から）



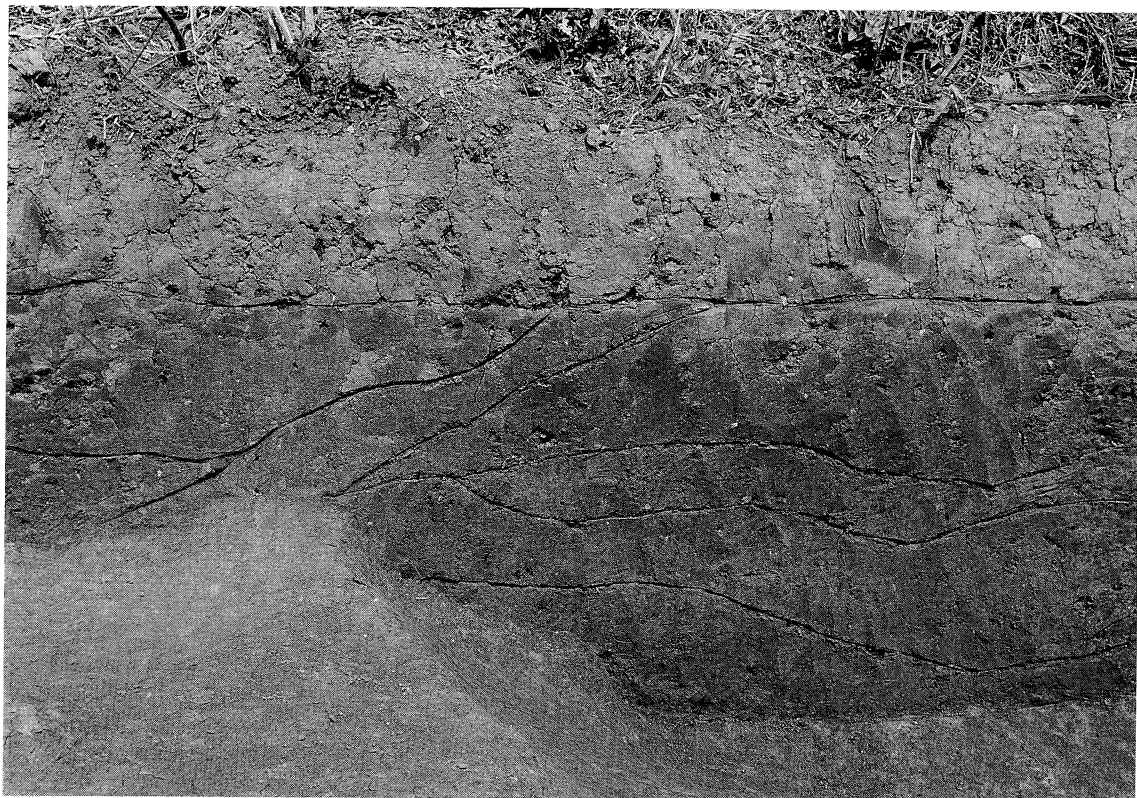
b. 1号溝（北から）



a. 1号溝土層



b. 1・2号溝間の土層



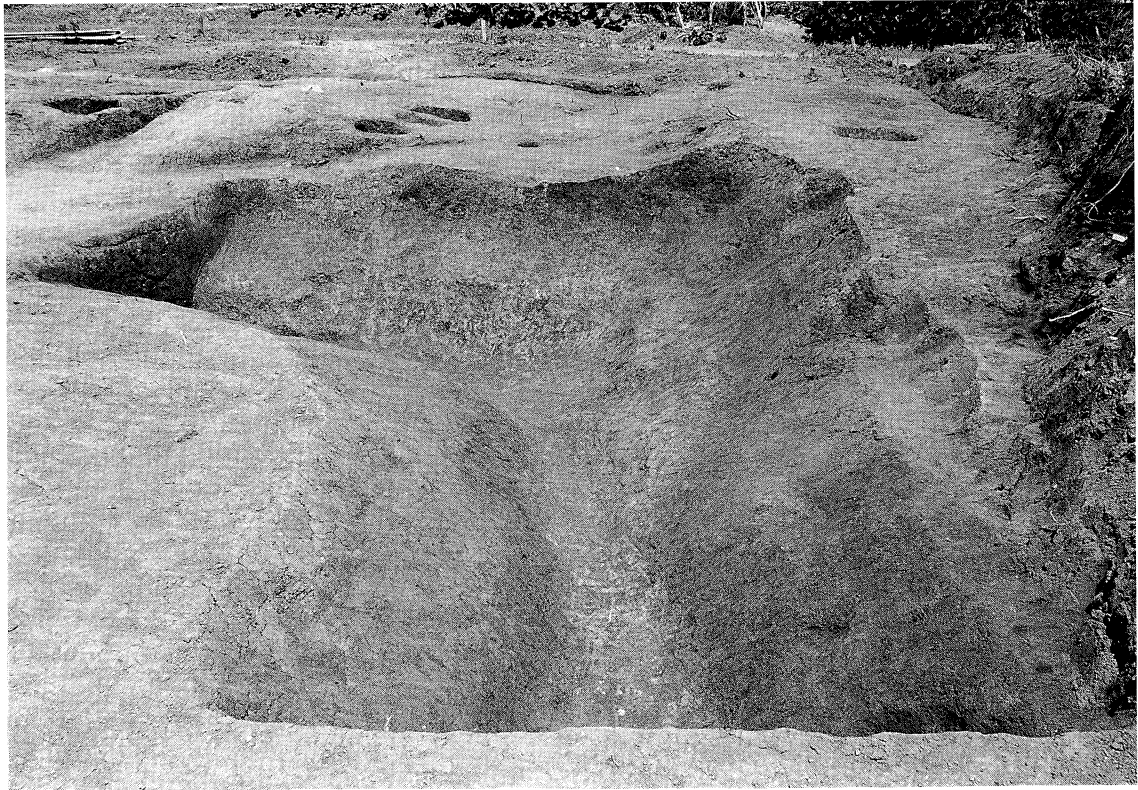
a. 1・2号溝間の土層（近景）



b. 2号溝（上から）



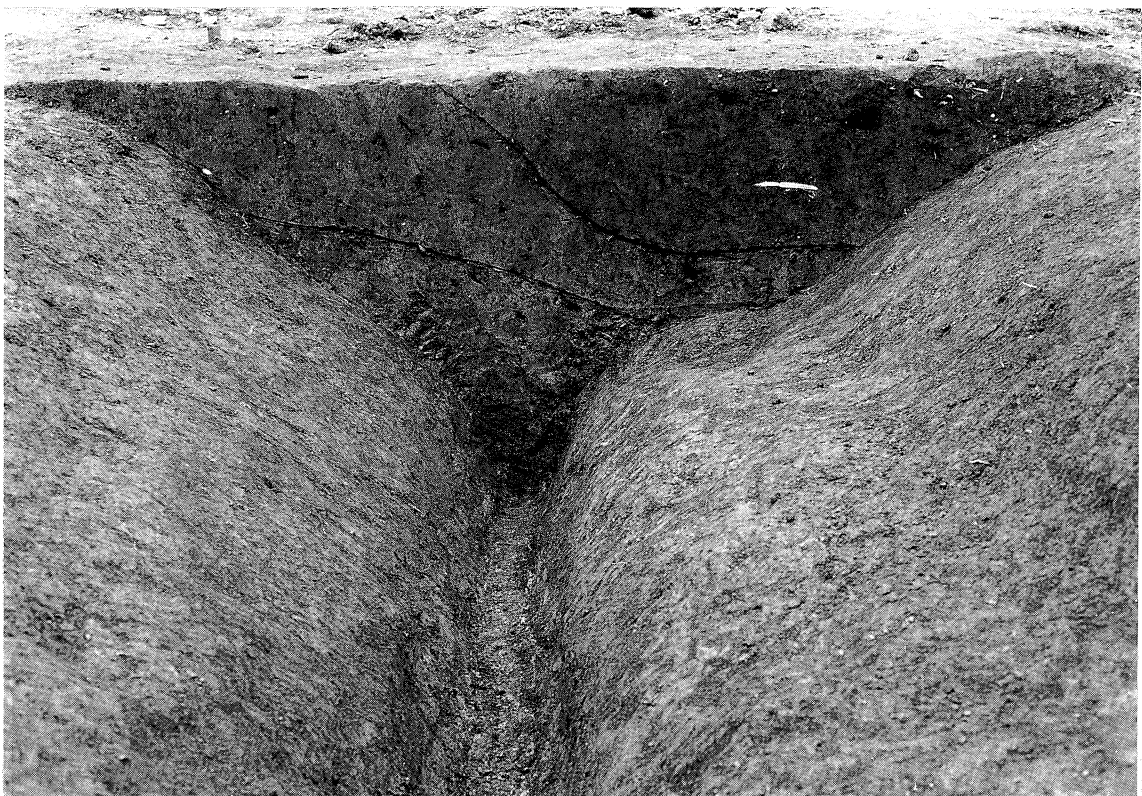
a. 2号溝角部（西から）



b. 2号溝角部（南から）



a. 2号溝 (東から)



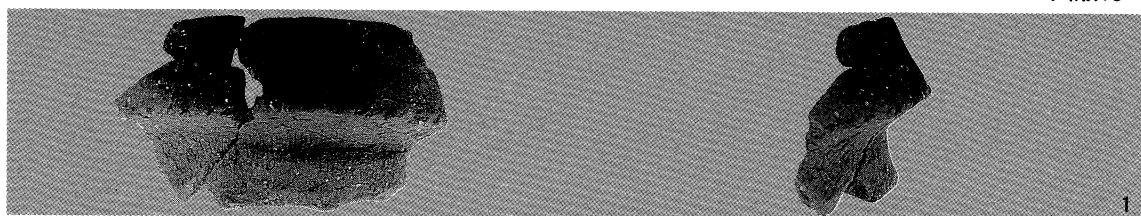
b. 2号溝土層



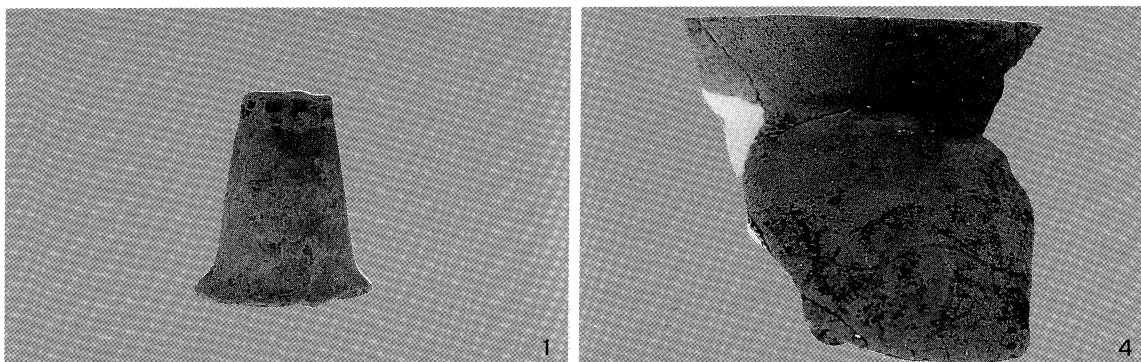
a. 2号沟土层



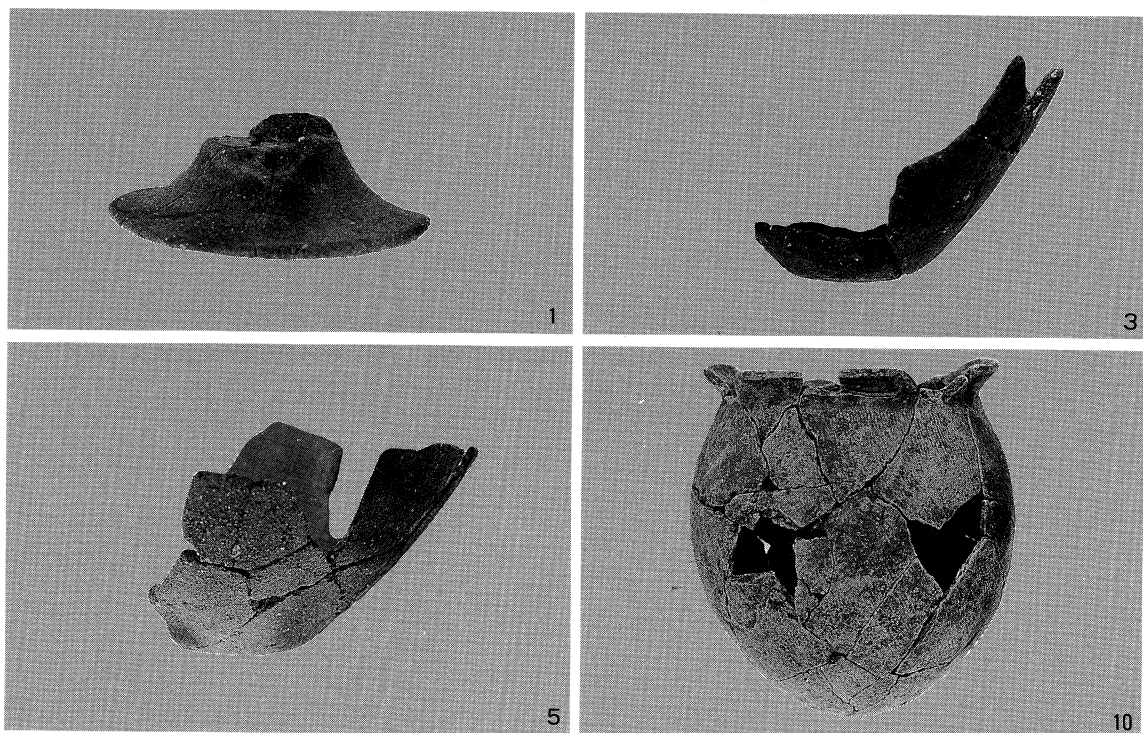
b. 3号沟土层



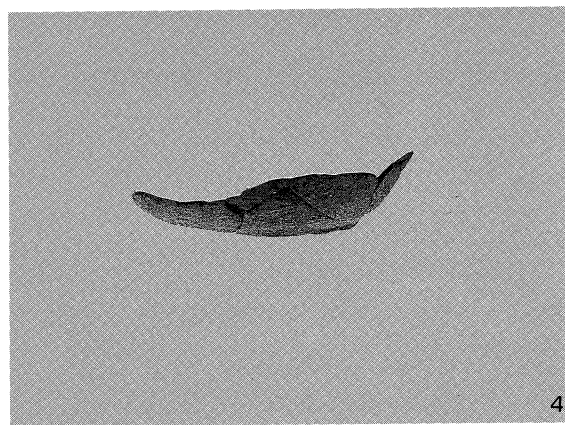
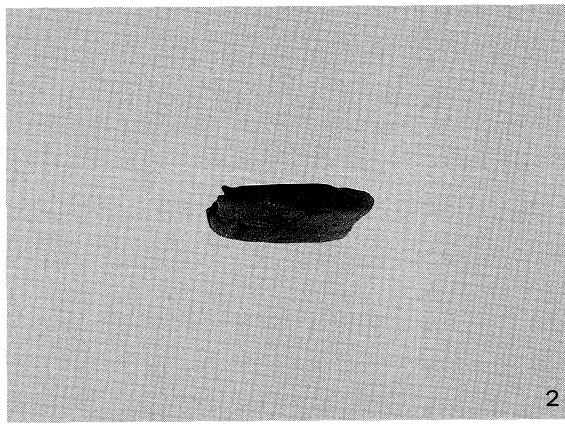
a. 土壇出土土器



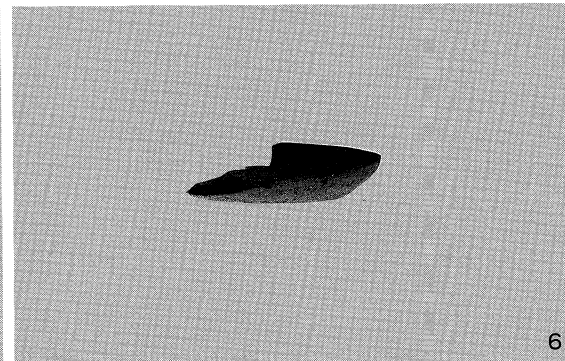
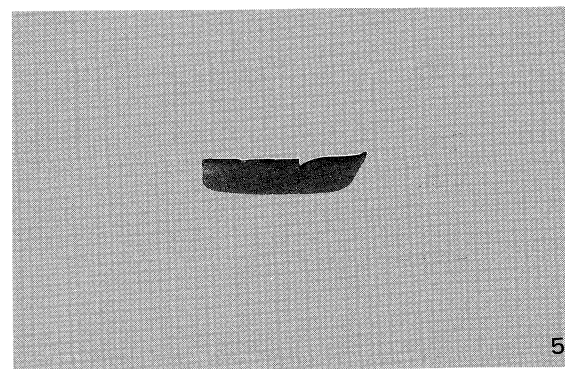
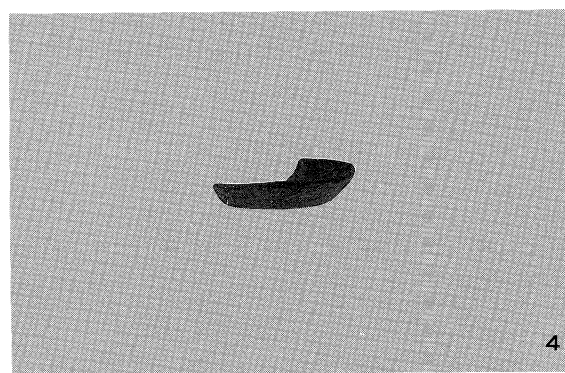
b. 2号住居出土土器



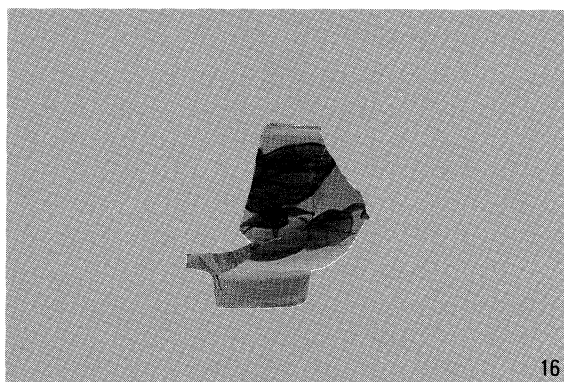
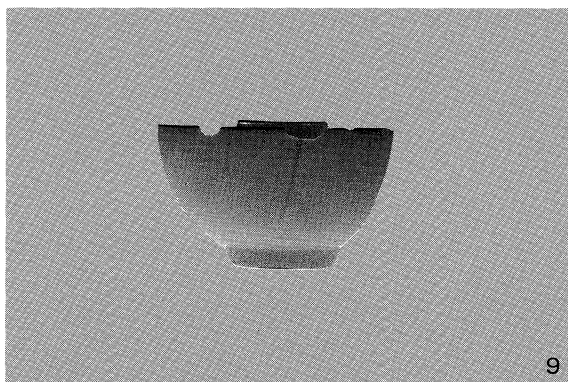
c. 土器溜り出土土器



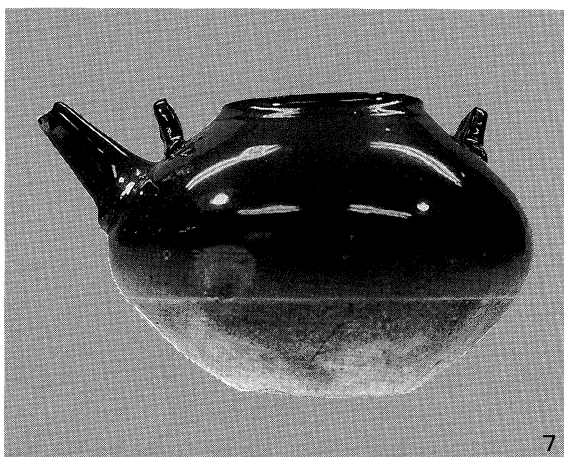
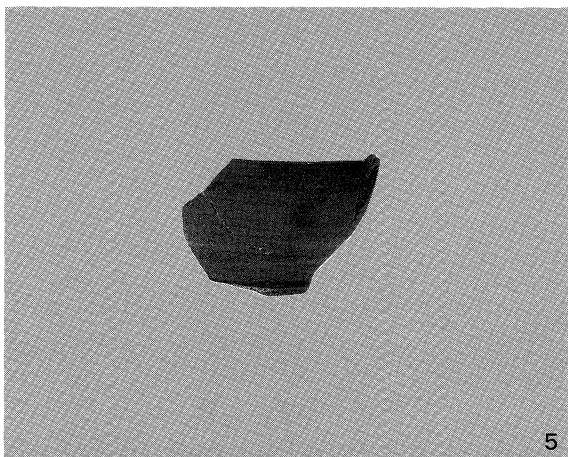
a. 1号沟4层出土土器



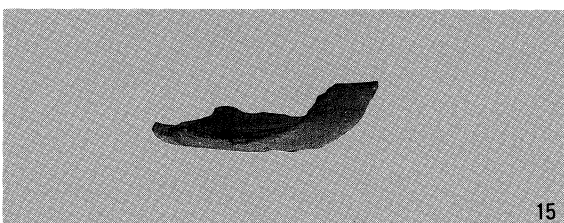
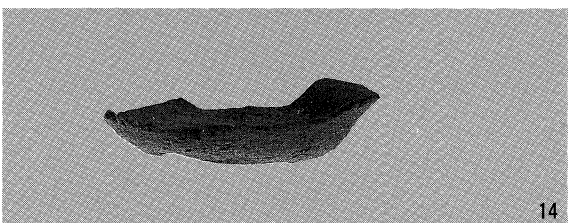
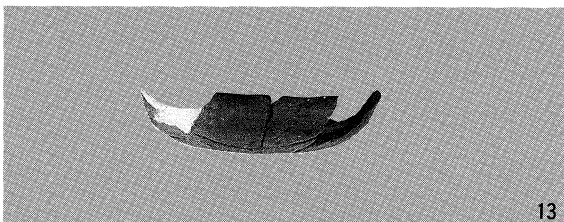
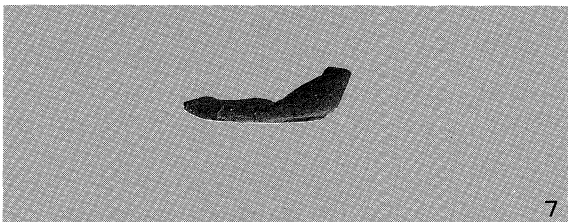
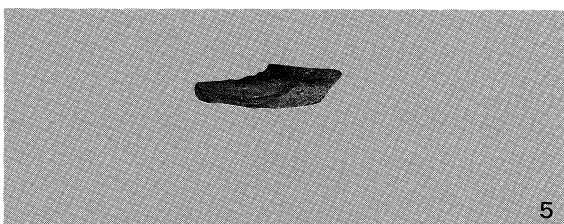
b. 1号沟扰乱层出土土器



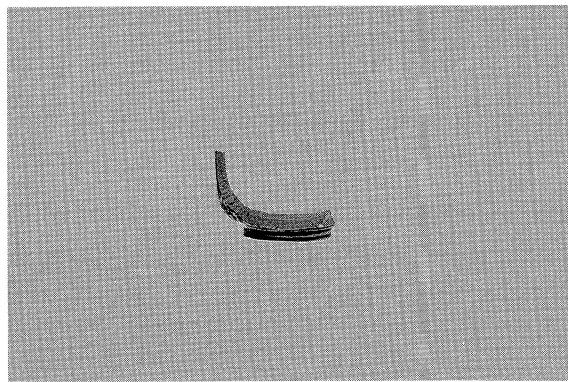
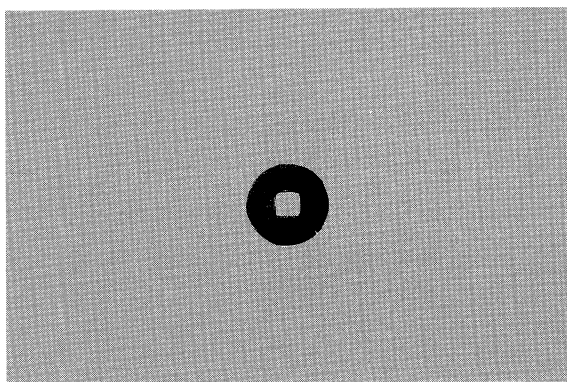
a. 2号沟1层出土土器



b. 2号沟2层出土土器



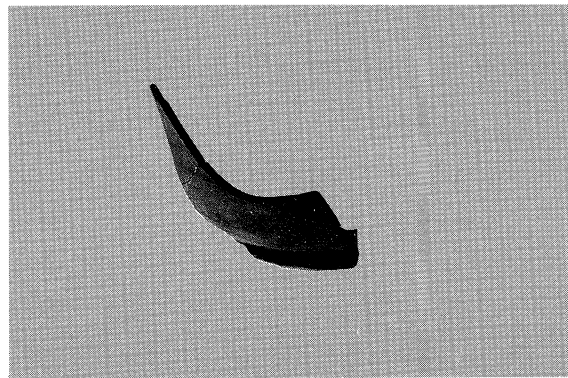
c. 2号沟3层出土土器



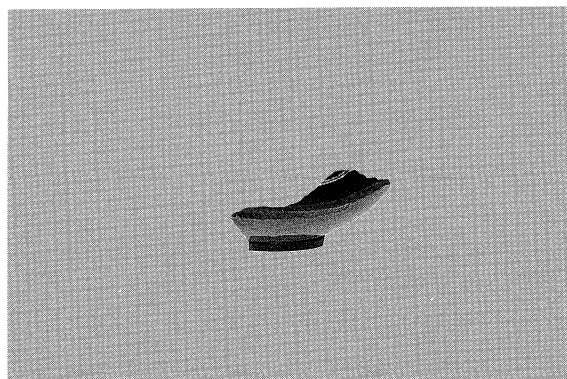
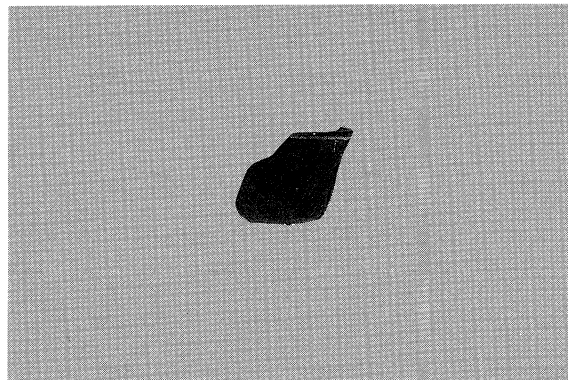
a. 3号沟出土遗物



b. 4号沟出土土器



c. 柱穴出土土器



d. 表土采集土器



a. 遺跡遠景（南から）



b. 遺構検出状況（南から）

**蔵持古屋敷遺跡
高祖遺跡群Ⅱ**

前原市文化財調査報告書 第46集

発行 前原市教育委員会
福岡県前原市大字前原623番地

印刷 (有) 松古堂印刷
福岡市西区周船寺1丁目7-64

